

PART 2

「子どもの居場所」づくりに参加する
「子ども」「保護者」「指導員」「運営者」への
アンケート調査結果より

第二章 「子ども」

「子どもの居場所」に集う、子どもたち 1901 人の回答より

家庭や学校だけでなく地域社会も連携して、心身ともにたくましく、自立心に富んだ子どもたちを育てようと始まった「地域子ども教室」。そこに集ってきた子どもたちがどんな自己像を持っているのか、思いやりや行動力、協調性、前向きに生きていく力などをどう養っていこうとしているのかアンケート調査をした。有効回答数は 1859 本であった。以下、アンケートから見える子ども像を報告する。

I. 友だちが多く、明るく、まじめ、初めての人とも仲良くなれる でも、そういう自分はまだ好きではない

— 自己像 —

子どもが自身をどのように捉えているのかを聞いてみると、第1位が「友だちがたくさんいる」、第2位「明るい」、第3位「初めての人ともすぐ仲良くなれる」第4位「友だちを笑わせるのが上手」である。1位の「友だちがたくさんいる」の「とても」と答えた子どもは2位の「明るい」を200名も上回っている。現代の子どもたちを見て、少人数の友だち関係しかなく、友だち関係で大変苦勞をしているといった指摘が多いが、子どもたち自身の認識はそうではないということだ。この結果から大変肯定的な自己像を持っていることがわかる。ただし「リーダー的」は「ぜんぜん」と答えた子が3番目に多く「そうでもない」を入れると55.5%の子どもが否定的である。また「目立つことが好き」も「ぜんぜん」「そうでもない」と答えた子が51.3%いる。また、「自分のことがけっこう好き」という問いにも「ぜんぜん」「そうでもない」と答えた子どもが44.9%もいる。友だち関係にはオープンで、友だちを笑わせるなど明るく過ごしているが、そうした自分をあまり好きではないと答えていることは気になるところだ。また、「怒りっぽい」と答えている子どもが約半数いることも興味深い。本当の気持ちは抑えてうわべは明るく楽しく振舞っているが、それが溜まってくるとイライラして怒りっぽくなるのかもしれない。本当の気持ちを抑えて明るく振舞っている自分を好きでないのか、怒りっぽい自分を好きでないのかこの調査ではわからないが、大変気になるところである。

【図1】

図1-1 自己認識

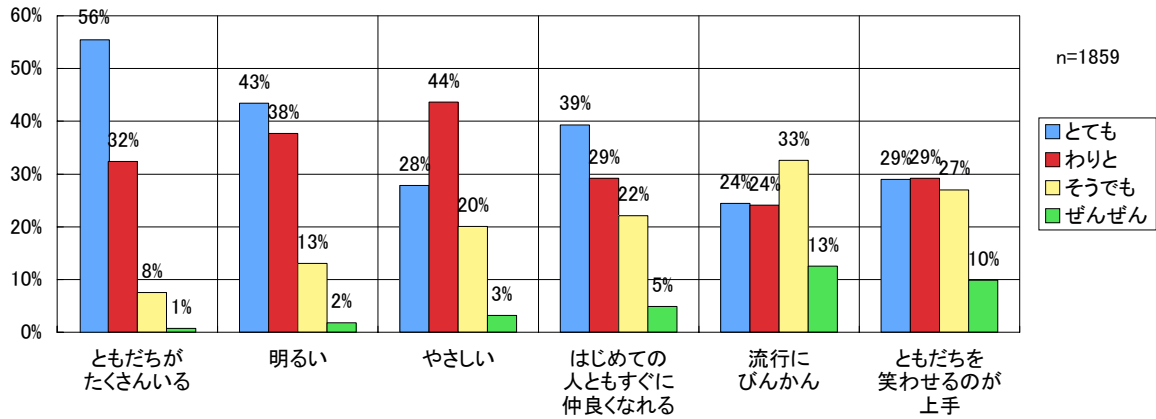


図1-2 自己認識

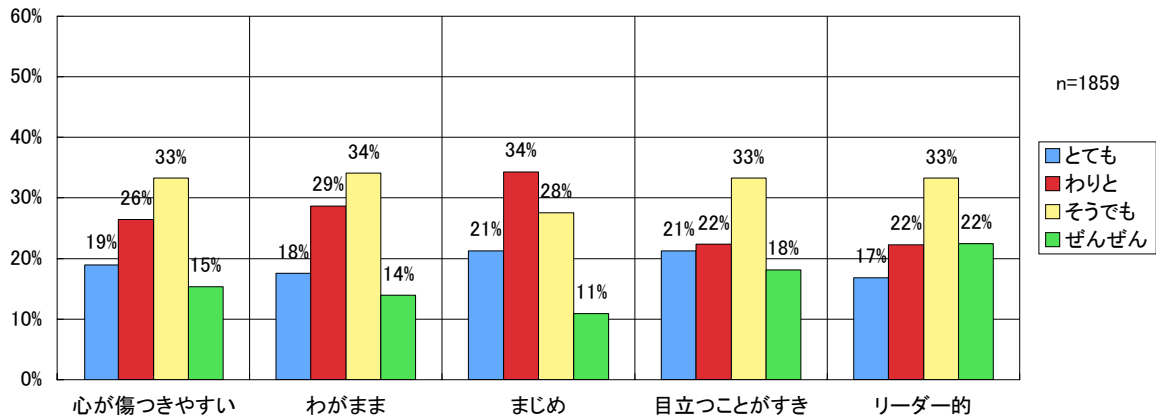
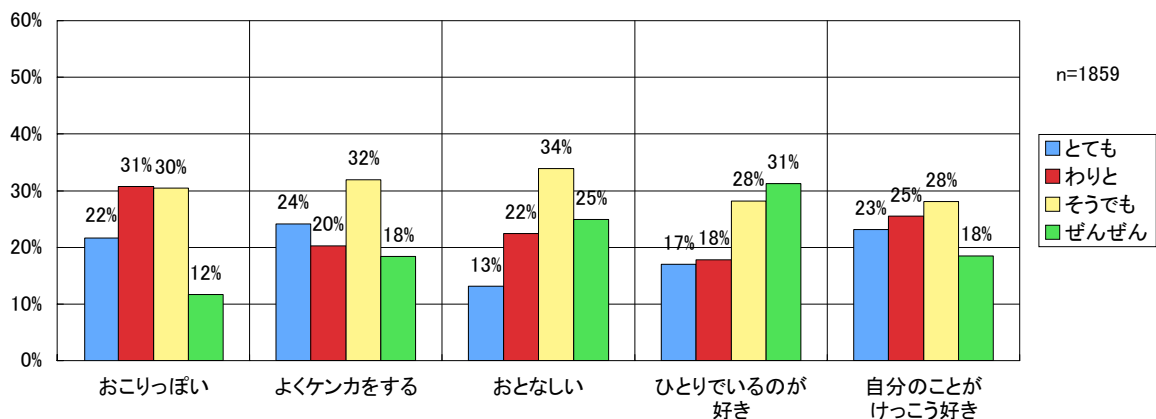


図1-3 自己認識



II. 自分がどう思われているのかとても気になる

— 友だち関係をつくる力 —

自身を、思いやりや協調性があると子どもたちは答えているが、具体的に友だちとの関係をどうつくっているのか、また、「学校」と「地域子ども教室」での友だち関係づくりはどうかを比較をした。

友だち関係づくりの具体例も、協調性や行動力があると答えた子どもが大部分であった。「ケンカをしても仲直りできる」「初めての人も気軽に話せる」「友だちの輪に入っていける」は「とても」と答えている子どもが30%を越えている。「困っている友だちを助けられる」「失敗したらすぐ謝れる」「まわりの人に上手にたのみごとができる」「自分と違うタイプの人ともうまくやれる」「ケンカをしたくても我慢できる」に「わりと」と答えた子どもも30%を越えている。人間関係調整力には自信があると認識している様子が見える。

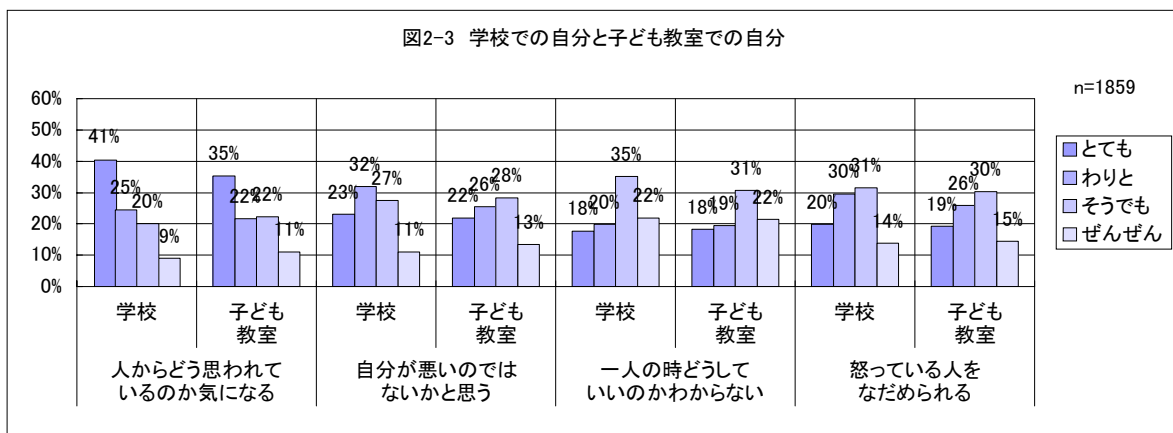
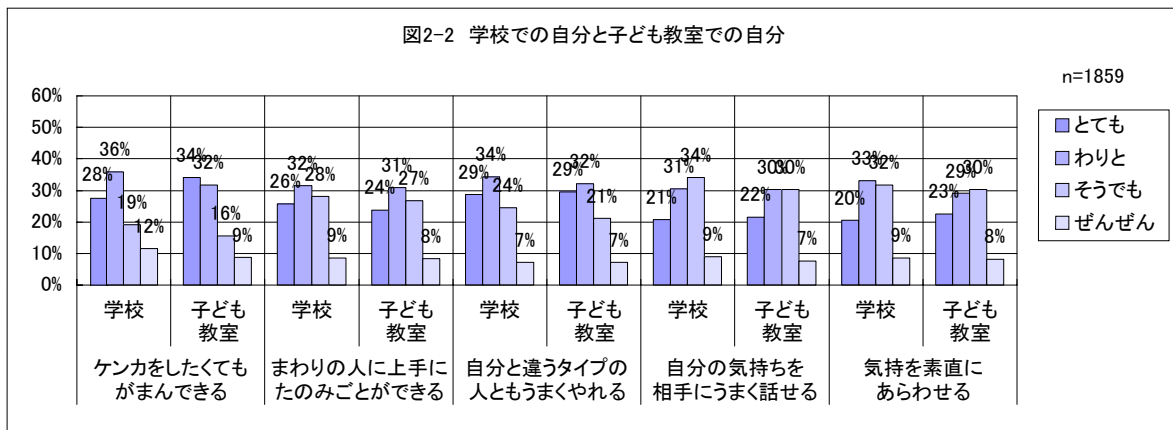
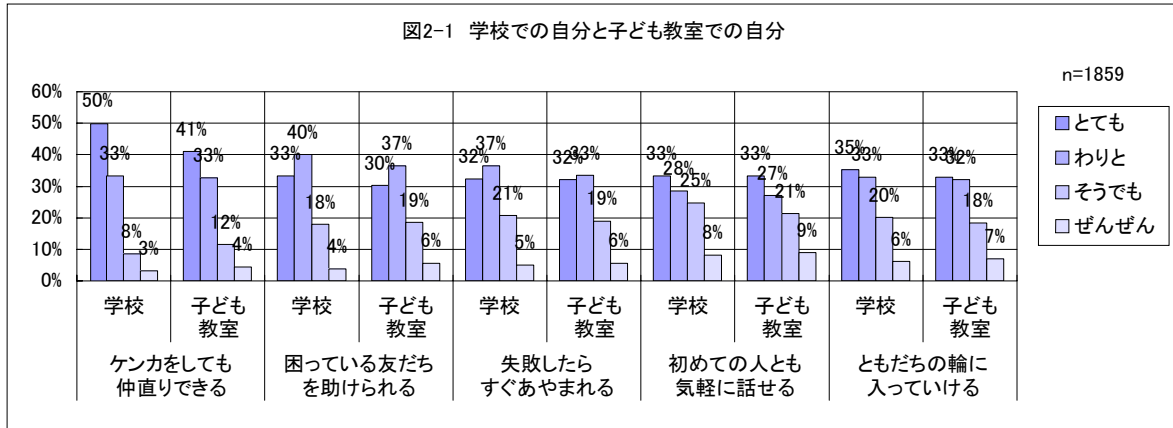
しかし、「自分の気持ちを相手にうまく話せる」には、「とても」「わりと」と答えた子どもと「そうでもない」「ぜんぜんちがう」と答えた子どもとほぼ同じであった。気持ちを素直に表せるのは「とても」「わりと」の方が少し多いが「そうでもない」と答えている子どもが30%近くいる。友だちとの関係は自分の気持ちを言葉で表現し、相手の気持ちも聞き、互いに分かり合うという関係ではなさそうだ。また、「人からどう思われているか気になる」は2番目に「とても」が多い。「わりと」を足すと76.0%にもなる。「自分が悪いのではないかと思う」の「とても」「わりと」を足すと57.4%になる。子どもたちは自分の存在価値を自分自身で決めるのではなく、人からどう思われるかで決めているように思える。人間関係調整力はあると多くの子どもたちが言っているがその基盤はしっかりしていないことがうかがえる。

また、学校と地域子ども教室での友だち関係の違いは数値的にはそう大きな差はないように見えるが、「困っている友だちを助けられる」「失敗したらすぐ謝れる」「まわりの人に上手にたのみごとができる」「自分と違うタイプの人ともうまくやれる」は学校の方が多い。地域子ども教室で出会う友だちは同じ学区の子どもたちとは限らないので、学校で毎日顔を合わせ、よく知っている友だちとの間ではそういった行為はできやすいのか、または他人の評価を気にしての行為かもしれない。

一方、「ケンカをしたくても我慢することができる」に、「とても」と答えたのは学校よりも地域子ども教室の方が多かったが、これは友だちに遠慮しているのか、何かを共同でつくりあげるといった目標があるために我慢できるのか興味深い。

また、「人からどう思われているか気になる」、「自分が悪いのではないかと思う」という設問に「とても」「わりと」と答えた子どもは学校の方が少し多い。前項で「目立たない」「リーダーではない」と答えた子どもが多いことから、人の目が絶えず気にな

り、何かトラブルが起きるとまず「自分が悪いのではないか」と思う子どもが多いことがわかる。学校での友だち関係はストレスが強いことがうかがえる。【図2】

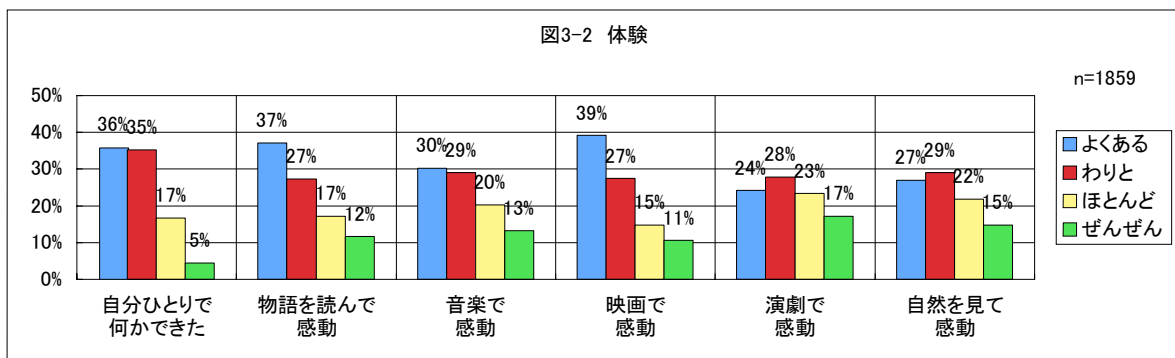
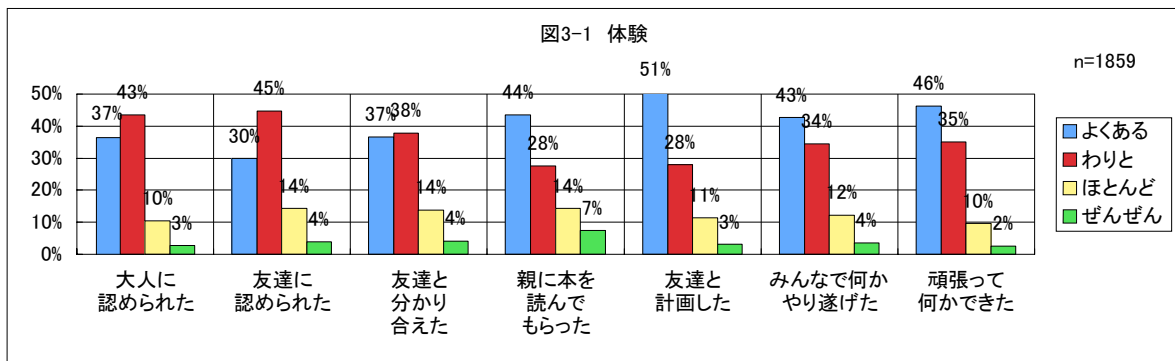


Ⅲ. 友だちと計画したり、みんなで何かをやり遂げた経験、頑張っって何か出来た経験は多くの子どもがしている

— これまでの体験 —

これまでの体験では「友だちと計画した」「頑張っって何かできた」「みんなで何かをやり遂げた」経験が「よくある」「わりとある」と答えた子どもが70%を越えている。一方で、「おとなに認められた」「友だちに認められた」「友だちと分かり合えた」「みんなで何かやり遂げた」経験が「ほとんどない」「ぜんぜんない」と答えた子どもが10%を越えている。また、「親に本を読んでもらった」「物語を読んで感動した」「音楽を聴いて感動した」「映画を見て感動した」「演劇を見て感動した」「自然に触れて感動した」体験が「ほとんどない」「ぜんぜんない」と答えた子どもが20%を越えていることもわかった。子どもたちの5人に1人はこうした感動体験がないことになる。

【図3】



親や先生やおとなの人に認められて嬉しかった体験や、友だちと一緒に達成感を味わった子どもたちがたくさんいる一方で、心を育むような感動体験がない、または少ない子どもたちが多くいることがわかる。

他者から誉められたり、認められたりする経験は子どもの自信になり、物事に取り組む姿勢や人間関係をうまくつくっていく力の源になるものだが、その基盤になるものが薄いことがうかがえる。

IV. 自分で考え出した遊びがある

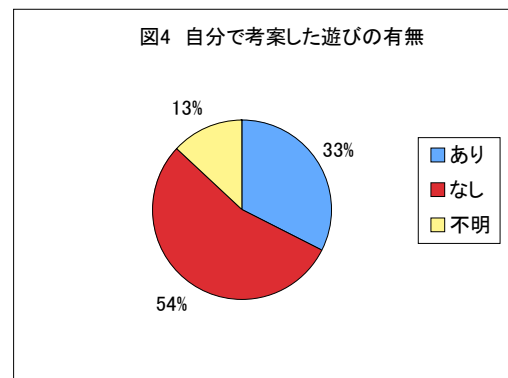
自分で考え出した遊びが「ある」と答えた子どもが33%。「ない」と答えた子どもが54%であった。【図4】

「ある」と答えた子どもの遊びの記述をみると、「かっこつけだるまさんごっこ」「たたいてわざやってじゃんけんポン」「ボール取り放題ゲーム」などこれまでのごっこ遊

びに工夫を加えたものが多く見られた。中学生になるとカードゲームとか、コンピューターゲームがあがってくるようになるが、友だちと一緒に体を使う遊びを考え出していることが特徴である。地域子ども教室では人と関りあう様々な遊びが工夫、創出され、遊びの種類が広がっていることがうかがえる。

<例>

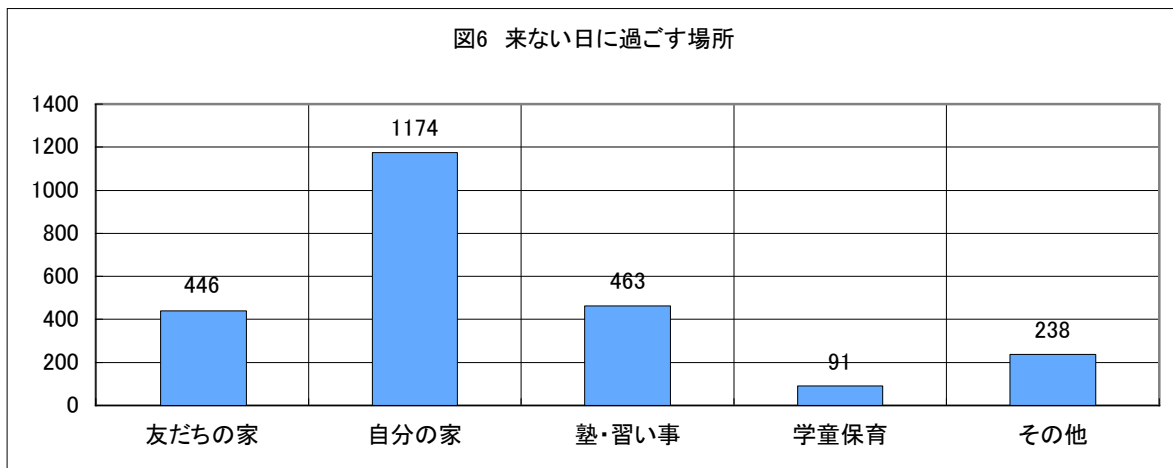
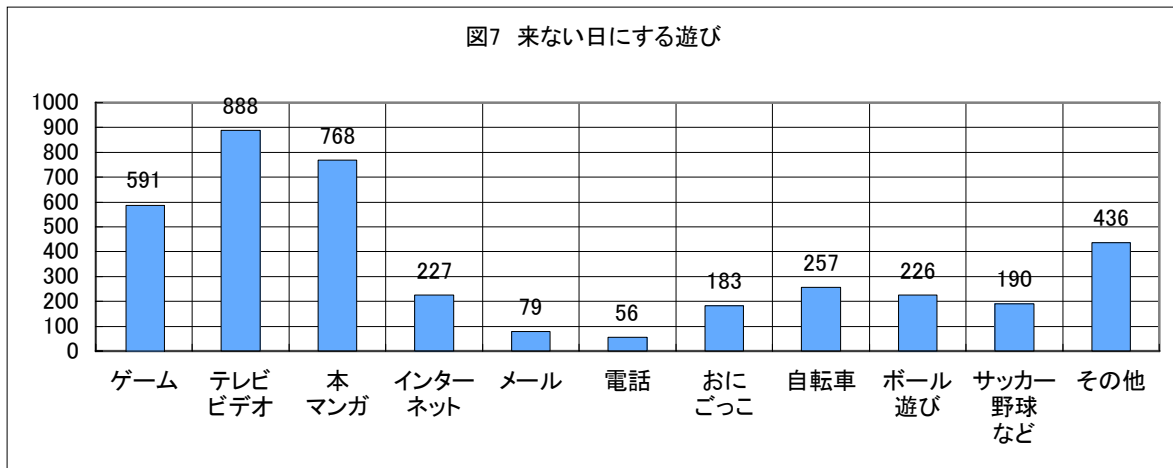
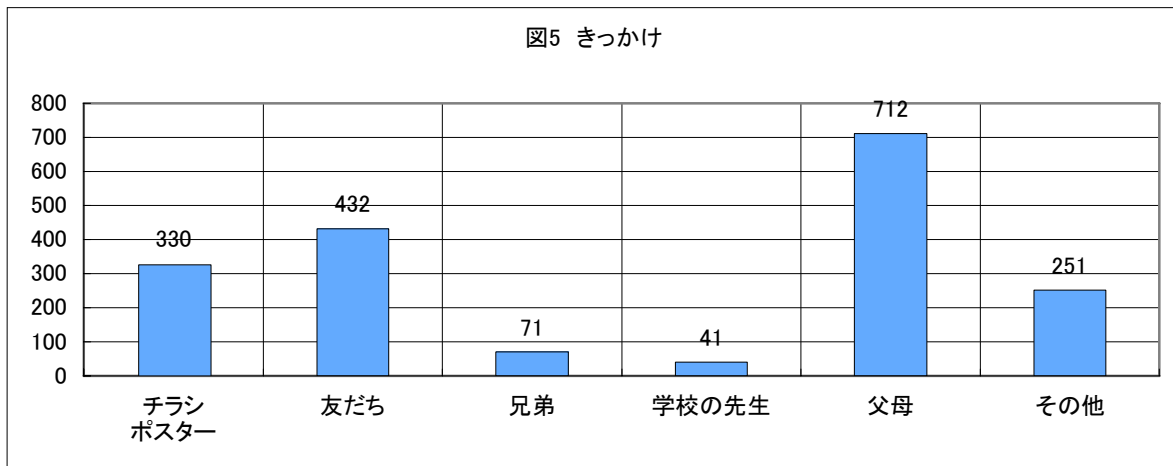
あそび	あそび	あそび
ひそひそごっこ	おにごっこもどき	ボール取り放題ゲーム
化粧しあいごっこ	いろこおりおに	一輪車メリーゴーランド
ドレスごっこ	修行ごっこ	タイヤ遊び
じゃんけんすごろく	宇宙人・宇宙船ごっこ	タイヤと木の秘密基地作り
せっけい図紙芝居	たたいてわざやってじゃん	カンフーじゃんけん
おつかいゲーム	けんポン	背負い投げ大会
指プロレス	人間ドミノ	どこでもついていく探検隊
かっこつけだるまさんごっこ	靴下投げボール物取り	パソコンゲーム



V. 地域子ども教室に行かない日は家の中で、一人でメディア接触

地域子ども教室にくるきっかけは、「父母からすすめられて」が一番多く、次いで「友だちから誘われて」「チラシ・ポスター」の順になる。放課後の子どもの安全が社会問題になっている現在、親の理解のもとで、親から勧められて子どもたちが参加している様子が見える。また子どもが友だちどうしで誘いあったりチラシやポスターを見て、自分の意志で参加している子どもが多いことも見える。

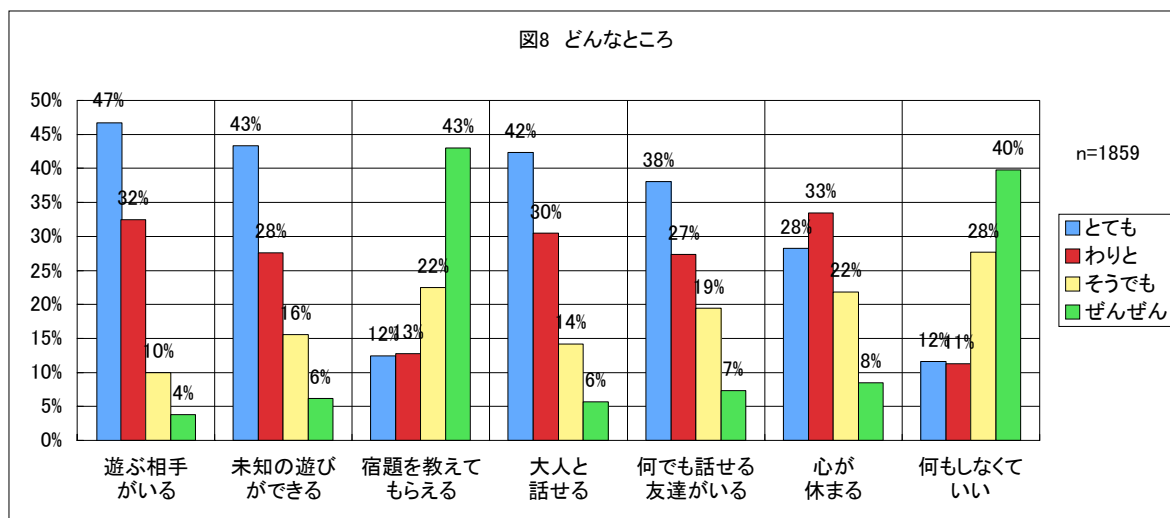
地域子ども教室に行かない日の放課後は、自分の家や友だちの家でテレビ、ビデオを見る(22.8%)、本やマンガを読む(19.7%)、ゲーム(15%)、インターネット(5.8%)、メール(2.0%)電話(1.4%)などをして過ごしている。これらは全体の65%になる。「その他」で記述されたものは、塾、お稽古、スポーツクラブ、親と買い物というものが多かった。戸外で一定の人数が必要な「おにごっこ」や「サッカー・野球など」の遊びをしている子どもは9.6%で、大半の子どもが家の中で一人でバーチャルな物ばかりに触れていることがわかる。(複数回答)このことから、放課後の子どもたちに向けて、積極的に「場所」を提供し、一緒に遊べる人を配置しないと、子どもたちからの自発的な集団は出来ないということがわかる。【図5】【図6】【図7】



VI. 知らない遊びができ、友だちがたくさんいて心が休まる「地域子ども教室」

地域子ども教室をどんなところと捉えているかという設問に、1位「遊ぶ友だちがいる」、2位「知らない遊びができる」、3位「おとなと話せる」、4位「なんでも話せる友だちがいる」、5位「心が休まる」。これらの設問に「とても」「わりと」と答えた子ども

はそれぞれ70%を越えており、地域子ども教室では、知らない遊びをたくさんの友だちとして、楽しくホッとできる居場所になっている様子うかがえる。また、「おとなと話ができる場所」だと答えている子どもが多い。地域子ども教室の指導員や講師など、子どもたちの日常では出会えないおとなと接触できることが嬉しく、また興味を持っておとなと関わっている様子うかがえる。【図8】



Ⅶ. 学校は勉強するところ、地域子ども教室は楽しいところ

学校も地域子ども教室もどちらも友だちがいて、「友だちと遊ぶところ」というのは共通しているが、当然のことだが学校はほとんどが「勉強するところ」と答えている。低学年は「友だちと遊べて楽しいところ」という記述が多いが、高学年になると「自分を出せないところ」「間違っはいけないところ」といった記述が目につく。人間関係づくりの項で「人からどう思われているのか気になる」「自分が悪いのではないかと感じてしまう」子どもが多いこととの関連が見える。

地域子ども教室はほとんどの子どもが「楽しいところ」と答え、また「安心して自分を出してもいい場所」と答えている子どももいる。学区を越えた子どもとの出会いで緊張感はあるものの、少人数の友だち関係で、気心が知れてくると安心して自分を出せ、今まで出会わなかったおとなと出会い、自分を認めてもらえ、周りの人の目を気にしながら過ごす学校の「教室」とは全く空気が違う「教室」と捉えている。新しい遊びを覚えたり、創り出したりと、みんなとの共同作業を通じて、自分の居場所が確保できている様子うかがえる。また、教師や親といった縦型の人間関係でない、斜め上の「おじちゃん」「おばちゃん」「おにいさん」「おねえさん」の関係にある指導員、また分野ごとの専門性を持った講師とのふれ合いが地域子ども教室の魅力の一つになっていることもうかがえる。

「地域子ども教室」「学校」はどんなところ

学年	性別	地域子ども教室	学校
小1	男子	太鼓を思いっきりたく。みんなで遊ぶ。楽しいから自分で行きたくなる。	勉強するところ。行かなくてはならないところ。でも楽しい。
小1	男子	遊ぶところ。黒板に絵が描ける、楽しい。	勉強するところ。勉強はあまり楽しくない。遊ぶのが楽しい。
小1	女子	おとなの人に遊びを教えてもらったり、家では遊べない友だちと自由に遊べる場所。	勉強して友だちをつくる場所。
小1	男子	囲碁が面白い。きびしい・・・上級。楽しい・・・教えてもらう。うれしい・・・対局。	きびしい・・・漢字。やさしい・・・算数。楽しい・・・遊び。うれしい・・・ほめられた。
小2	女子	うるさいところ。	勉強するところ。
小2	女子	楽しいところ。先生の教え方が楽しい。	うざいところ。馬鹿にされる場所。
小2	男子	周りの友だちが気にならない。ものづくりができる。	勉強、テスト、決まったことをやっていけばよい場所。
小2	女子	楽しく遊べていろいろな経験ができる。行けば行くだけおもしろい。笑って過ごせる場所。	勉強ができて賢くなれて楽しい。
小2	女子	放課後、約束をしなくても遊べる場所。	楽しい場所。
小2	女子	遊んだり、エイサーの練習をしたりダンスが楽しい。	勉強をする場所。
小2	男子	ゲームや食べ物をつくって楽しい。	勉強する場所。
小2	女子	先生に会えるから。友だちがいるから。遊べるから。	勉強すること。遊ぶこと。
小3	女子	知らない人でも仲良く出来て、いっぱい知らない遊びが出来て楽しい場所。みんなでいっぱい遊ぶ場所。	勉強する場所。700人以上の人と休み時間に遊ぶ。
小3	男子	暇な時、行くと楽しくなる。料理をつくるのが楽しい。	勉強が大変だけど、友だちとあそんだりしゃべったりするのが楽しい。
小3	女子	先生がいろいろ教えてくれる。歌が楽しい。	ただ勉強して、友だちと遊んで給食食べて、みんなで帰るだけの場所で、かなりつまらない。
小3	男子	学校がちがう人やおとなと気軽に話せる。	勉強は好きじゃないけど友だちと遊べるから楽しい。
小3	女子	いろんなおもちゃで遊ぶ。おとなの話に参加できる。第2の家みたいで開いている日は毎日行く。楽で地上の天国。	勉強ばかりでつまらないが休み時間は本読みができる。
小3	男子	楽しい。面白い。来た甲斐がある。いろいろな体験ができる。親方が来る。	楽しい。面白い。友だちがいる。
小3	女子	もう終わっちゃうの！もっとやりたい。楽しい。4時半じゃたりない。	しんどくて、やっと終わった一っぺん感じ。でも楽しい。
小4	女子	ふだんあまりやらないことを友だちとできて、おとなの人とたくさん話せる場所。	いろいろなことを考えてくれて、友だちと楽しく遊べる場所。
小4	男子	いろんなことを覚えられて楽しい。	6教科全部教えてもらえる。
小4	女子	学校より楽しい場所。一人でいても「なにしてるの？」「どーしたの？」という人がいないし、すごく楽しい。	ただ単に勉強して、帰ってくるだけの場所。
小4	女子	友だちがたくさんいておとな子どもも関係なく楽しくできる場所。	友だちがたくさんいて、休み時間や給食が待ち遠しい場所。

小4	男子	友だちと会えていろいろな遊びができる。時間が短いのもっと長いといい。もっと遊びたい。	勉強するところが友だちと遊べるのが楽しい。やるべきことをしないと叱られるので嫌だ。大変。
小4	女子	友だちがいっぱいいる。冷たくされない。自分が自分でいられる。いっぱい踊れる。楽しいことがいっぱいある。	行かなきゃいけないところ。友だちと先生がいるところ。勉強するところ。安全なところ。
小4	男子	太鼓がたたけて楽しいところ。先生の話や芸が面白い。	理科の実験ができる。ラグビーができる。図工でいろいろなものが作れて楽しい。給食がおいしい。
小4	女子	いろんなところへ行行ってスタッフの人と遊べて楽しい。	先生と勉強。
小4	女子	いろんな楽器が吹ける。楽譜が読めるようになる。	勉強をするところ。漢字を習う、使う、覚える。
小4	女子	いろんな探検をさせてもらえる。	勉強するだけ。
小5	女子	興味のあることをそのことが詳しい人に教えてもらおう。教えてくれる人が優しく楽しい人。	勉強を教えてもらう場所。
小5	女子	講師や友だち、他の学校の人と触れ合える場所。	義務教育でこなくてはいけないことが法律で決められている場所。
小5	男子	おとなと普通にしゃべれる。リラックスできる。楽しくしゃべれる。	勉強するところ。友だちといるところ。楽しいところ。
小5	女子	ちょっとおとなになった感じ。意思をはっきり言える。目立てる。いじめがまったくない。	自由、内気になる。目立てない。グルになる。いじめが多い。
小5	女子	そこにいる時間全部が休み時間のようにとても楽しい。	勉強も入れて「とても楽しかった～」というときがある。
小5	男子	自由がある。年齢のちがう人と交流がある。遊ぶところ。行っても行かなくてもいいところ。	学びながら遊ぶところ。行かなきゃいけないところ。
小5	男子	山あり、川あり。	指導されて生活するところ。
小5	女子	勉強などをして大変だったことをリラックスさせるところ。	勉強をして新しいことを学ぶところ。
小5	女子	日本の文化に触れられて嬉しい。	友だちと遊べる。勉強できる。
小5	女子	沖縄の踊りが進んで覚えられるので楽しい。いろんな友だちができる。	勉強も学べるし友だちとも遊べる。
小5	女子	おとなや学校のちがう人と話せる楽しいところ。	あまり自由になれないところだけれど、友だちと遊ぶのは楽しい。
小5	女子	自分がコンピュータについて学びたかったので面白いことが次々わかって楽しい。「自由」なところ。	別に学ばなくてもよいと自分で思っているものでも学ばなければいけないところ。
小5	男子	インターネットでの他校との交流や、テレビ電話ができて楽しい。	毎日友だちと一緒に勉強したり、遊んだりするところ。
小5	女子	将来の夢を実現させるための力をつけるところ。	社会に出るための勉強をするところ。
小5	女子	相談したいことが話せる、とても大切な場所。	おとなになるための第一歩をつくる場所。
小6	女子	新しい友だちをつくれるところ。みんなで協力して遊ぶところ。いろんな遊びが出来る場所。おとなとも気軽に話せる場所。	勉強するところ。友だちを作る場所。ボール遊びなどいっぱい体を使って遊ぶところ。
小6	女子	思いっきり自分を出せる場所。いつも楽しい場所。気が休まる場所。みんなといると楽しい。なぜか何でもわくわくする。想像を使って遊ぶ。頭に刺激を与えられる。	勉強をするところ。友だちと遊ぶところ。しゃべるところ。親友を作る場所。

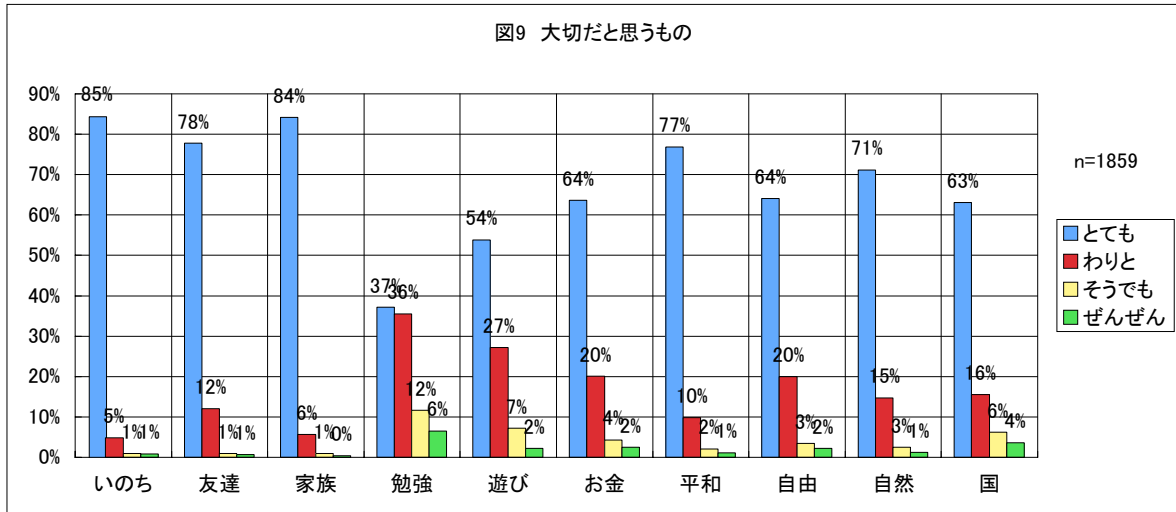
小6	女子	自分の気持ちで劇ができる。	いろいろなことを学ぶところ。
小6	女子	先生方と仲良くなれたり、えんげきをおしえてもらって楽しい。	勉強をして1日中過ぎてしまって、遊んでいるけど、あまりあそべない。
小6	女子	講師の先生たちがとてもユニークで何でも聞けて、優しく楽しく教えてもらえるところ。	いろんなことを教えてもらって、間違いをしてはいけないところ。
小6	女子	ダンスのレッスンが楽しい。	居心地悪い、勉強、信用ができない。
小6	女子	ゲームをやっているでもすぐに入れてもらえるところ。友だちと会うのが嬉しい。一人の時間が無い！リラックスする場所。はっきり意見が言える場所。	グループができていてなかなか入れない。ずっと一人のことが多い。
小6	女子	尺八を吹くときに新しい音が出た時。新しい曲に挑戦する時。	将来のために勉強で学ぶところ。
小6	女子	学校のちがう友だちと遊んだり、年齢の大きい人としゃべれること。	塾よりはましだけれど、友だち関係が複雑なところ。
小6	女子	学校とはちがう友だちや遊びに触れ合えるところ。ルールに従うんじゃなくて自分たちでルールをつくること。	みんなと仲良くなるためにあるところ。ちゃんとルールがある。
小6	男子	話す人がいっぱいいるところ。今まで知らなかった体験をたくさんするところ。	勉強するところ。実験が楽しいところ。
小6	女子	夢と希望を与えてくれる。心が安まる。	勉強でごちゃごちゃしている。
小6	女子	本音が言える。相談ができ、遊んで楽しい。	本音が言えない。いじめが起こる。相談ができない。楽しくない。
中1	男子	ケンカをしないで仲良く遊べる場所。勉強のことを考えないでいいところ。	いろんな友だちと遊べる。先生も優しい。勉強が難しい。
中1	男子	話や悩みを聞いてくれる。自由。おとなの話が聞ける。	進路が大変。自由がない。
中2	女子	自由で誰かと何かを作り上げる心が大切など。失敗を許してもらえるからいろんなことが進んでいける。真剣に取り組めることも友だちがいることも楽しい。	自分が思っていることを抑え、同調することが大切。集団生活や責任を学ぶ。社会貢献の一手手前の準備。
中2	女子	知らない人と仲良くなれる。上下関係がゆるい。自分で思ったように行動できる。	教えてもらう所で、上下関係がすごくあり厳しいところ。先生の言うとおりに動くところ。
中2	女子	自分が出せて、安心できる場。	人と人が言葉のナイフで他人を傷つける場。

Ⅷ. 「いのち」「家族」「友だち」は最も大切。「勉強」はそうでもない

子どもたちが大切に思っているのは、「いのち」「家族」が最も多く、次いで「友だち」「平和」「自然」「自由」「お金」「遊び」「国」「勉強」の順になる。「いのち」「家族」「友だち」と身近にいる「人」を大切だと思っていることがうかがえる。

この設問は順位をつけるものではなかったが、「勉強」が最低の位置になった。「ぜんぜん」「それでも」と否定的に捉えている子どもが18%もいるのは気になるところだ。このアンケートでその背景にあるものはわからないが、子どもたちの捉えている「勉強」とはどんなものか探っていく必要があるように思う。前項の「学校はどんなところ」の記述で「勉強ばかりでつまらない」「将来のために学ぶ」とあるが、「勉強すること」「学

ぶこと」が肯定的に捉えられない雰囲気为学校の中にできているのかもしれない。また、人間関係で学校がストレスの多い場所になっていることも「勉強」が大切なこととは思えなくなっている一因かもしれない。【図9】



まとめ

子どもが人として豊かに育つためには、「時間」「空間」「仲間」の3つの「間」、ゆとりと人間関係が必要だと言われているが、現代の子どもにはそのいずれもが欠けている。外で友だちと身体を動かす遊びが減少し、地域の中で異年齢の仲間集団や群れ遊びが見られなくなって久しい。また、こうした背景から子どもの人間関係調整力の低下や生きる力の低下が危惧されてきた。

こうしたことを踏まえて、子どもの放課後の居場所として「地域子ども教室」が設けられたわけだが、このたびの調査から「地域子ども教室」の目的どおり、異年齢の仲間集団や、群れ遊びの再生が行なわれていることが見えてきた。さらに、そこに数名のおとなが集団で関り、子どもの主体性を尊重し、寄り添うことが子どもの成長の支えになっていることも見えてきた。

子どもが意欲的に物事に取り組んだり、人間関係を調整する力を育てる活動は、「子どもが自分の興味・関心に基づいて自分の意志で取り組む活動であること」「子ども同士の交流がある活動であること」「おとなのよい関りがあること」だと言われている。地域子ども教室に参加している子どもはまさにこの状況にあるといえる。

また、自分がこれをやりたいという動機があって活動に参加している子どもは、その結果のいかんに関らず、達成感や満足感を得やすいと考えられる。また、その活動の成功のために我慢が必要な場合も頑張ることができる。しかし動機がなくおとなの方からの指示で参加している場合は面白くなければすぐ飽くし、うまくいかなければ投げ出したくなる。また、うまくいった場合でも自分が嬉しいと思うよりも、勧めた人の反応を気にするようになるのが常である。

地域子ども教室に集っている子どももおとなも自らの意志で参加していることが特徴である。そして、子どもたちは「行けば行くだけ楽しい」、「なぜか何でもわくわくする」、「真剣に取り組めるところも、友だちがいることも楽しい」、「4時半まででは時間が足りない」と表現している。仲間と「楽しくて、楽しくて、わくわくする」体験の醍醐味を体得しており、まさに心が豊かになる場所、「居場所」になっている様子がうかがえる。言い換えれば、子どもたちはこのような場所を渴望しているといえるのではないだろうか。

平成17年度地域子ども教室推進事業として文部科学省から民間が受託した「地域子ども教室」は193ヵ所322事業であるが、地域の教育力を回復し、子どもたちの心の豊かさを育むには、このような「居場所」が全国各地に設けられ、継続的に営まれることが急務であると考えられる。

【まとめ担当 西崎 宏美】

第三章

保護者

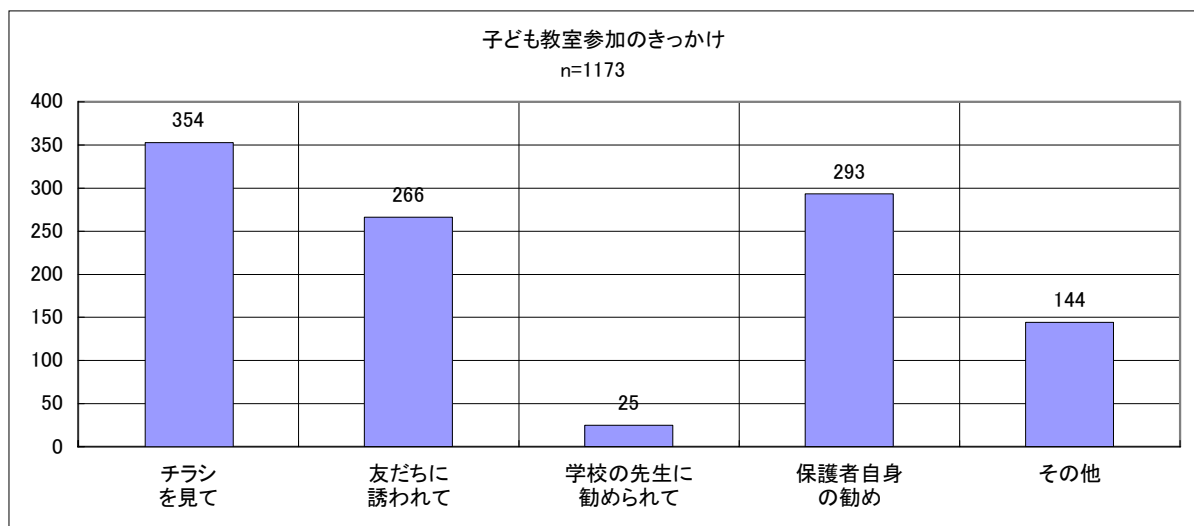
第三章 保護者

「子どもの居場所」に子どもを参加させた保護者 1173 人の回答より

ここまで見てきた全国各地の子どもの居場所づくり 322 事業は、広報も含め昨年の四月から本格的なスタートを切っている。これまで地域での子どもにかかわる活動を積み上げてきた団体も、また、この居場所づくりのために新たに結成されたグループもあり、地域社会での認知度は様々である。また、今回の調査に回答してくれた保護者においても、まだ、子どもは一回しか参加していないのだけという方も含み、子どもの参加のタイミングも様々となっているにもかかわらず、保護者からの回答数の多さは調査サイドの予想を大きく上回り、地域の「子どもの居場所」づくりに関して強い関心がもたれている事をうかがわせた。

I. 口コミによる子どもの居場所の周知

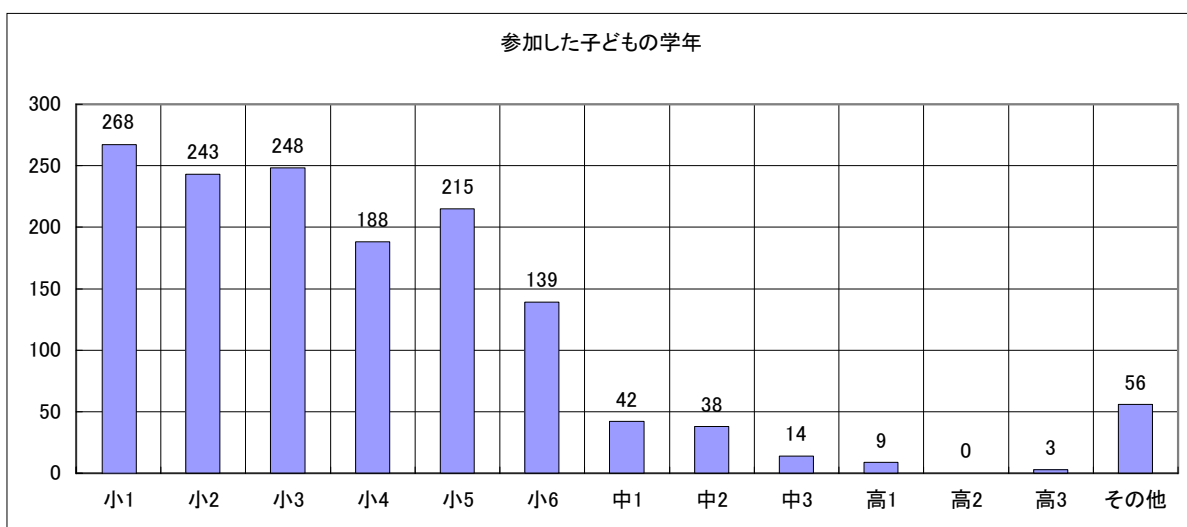
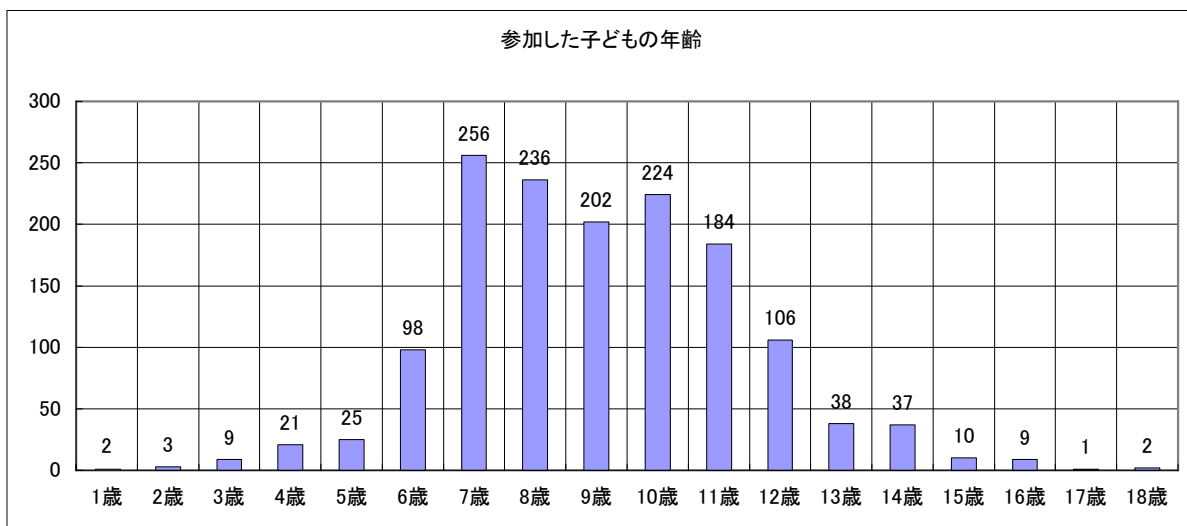
子どもを居場所に参加させたきっかけは、「ポスター、チラシをみて」が最も多く約 3 割、「保護者自身の勧め」「友だちに誘われて」がそれぞれ約 1/4 程度となっている。自由記述では、多くの保護者が、もっと学校なども含めて積極的な広報をするべきだという声をあげていた。



地域社会ではまだまだ、動きも小さな居場所づくりが大勢を占めており、その存在自体も、たまたま知ったので参加させることが出来たという実感を持っている保護者が多い。中には、子どもたちの多くが学校の同じクラスから参加しているのだが、担任の先生が「子どもの居場所」の意味、存在をよく知らずにいることも指摘されていた。こうした新たな動きを地域の幅広い連携につなげていくことは今後の大きな課題の一つとなる。

Ⅱ. 幅広い、子どもの居場所への参加年齢

この子どもの居場所事業の基盤は、文部科学省の推進するものであり、対象は小学生から中学生までを旨としていることから、参加者の中心となっているのは、小学生低学年が最も多く、また、保護者からのニーズも高いことがわかる。その一方で、参加している子どもの年齢層は大変に広く、「子ども」の全年齢層に広がっていることもわかった。この理由の一つに、兄弟での参加が多く見られる。お兄ちゃんが小学生で、弟妹が未就学児であっても、その居場所の運営サイドに受け入れる許容力がある場合に参加が可能となっているようだ。また、こうしたケースの場合には、その居場所が親子での参加を勧めているところも見られた。また、高校生の参加ケースでは、もともとの活動体に参加していたことから、準リーダー的な役割として参加していることもうかがわせる。

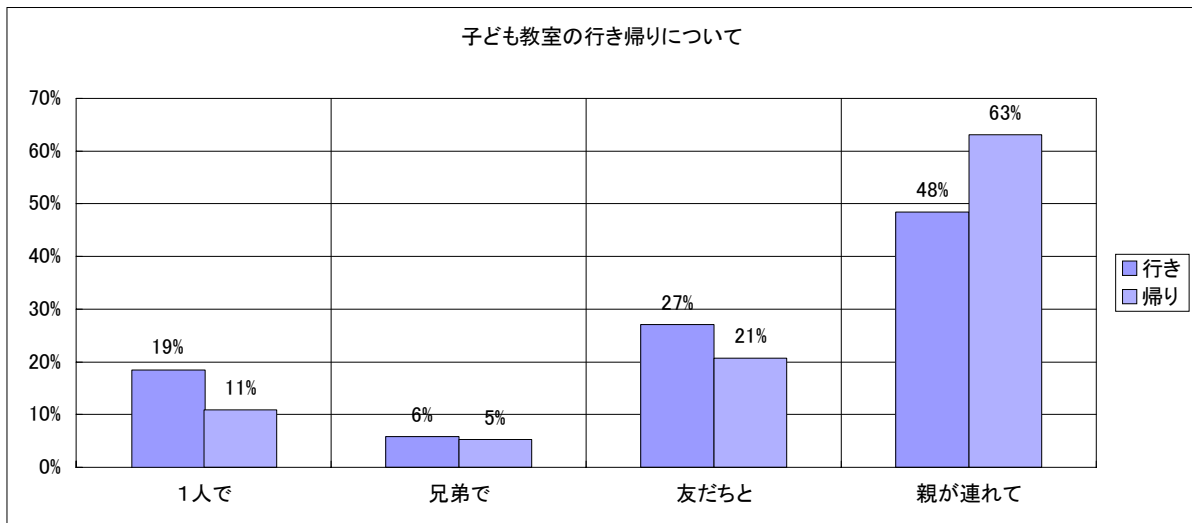


地域でのピアな支援関係は、支援者と被支援者の役割自体に柔軟性があり、循環し、世代交代していくことが理想であり、指導員として13歳の中学生が回答していたり、保護者の自由記述に

においても、異年齢の活発な交流と気づきが起きていることが多数報告されている。また、保護者の願いとしても、多様な世代とわが子のかかわりが求められており、居場所の運営趣旨にもよるが、多世代の参加を視野に入れることが望ましいだろう。

Ⅲ. 不安な子どもの放課後と、安全な居場所へのニーズ

今回の保護者 1173 人の回答用紙から滲み出てくるのは、地域社会と現代の社会への強い不安感である。この民間の子どもの居場所事業の実施会場は、たいへんに様々となっていて、学区も 1 校区から、いくつもの学校区を対象としているところまである。特に放課後から夕方の時間帯にかけての学校から居場所へ、居場所から自宅への移動は運営サイドにも、親にとっても最も心配な案件となっている。



この回答結果からも、半数を超える保護者が送り迎えをしており、居場所を開始する当初のイメージとしてあった、子どもたちが好きなときに来られる地域の居場所とは、大きく異なる実情が見えてきた。子どもたちの安全、安心がここまで脅かされる時代もかつてなかったのではないだろうか。文部科学省としても、この安全、安心を地域社会で確保することを最大の目的として、この事業を推進していることから、さらに地域社会の協力を得て、子どもと保護者に負担のかからない条件のよい場所としての「居場所」が求められるところである。

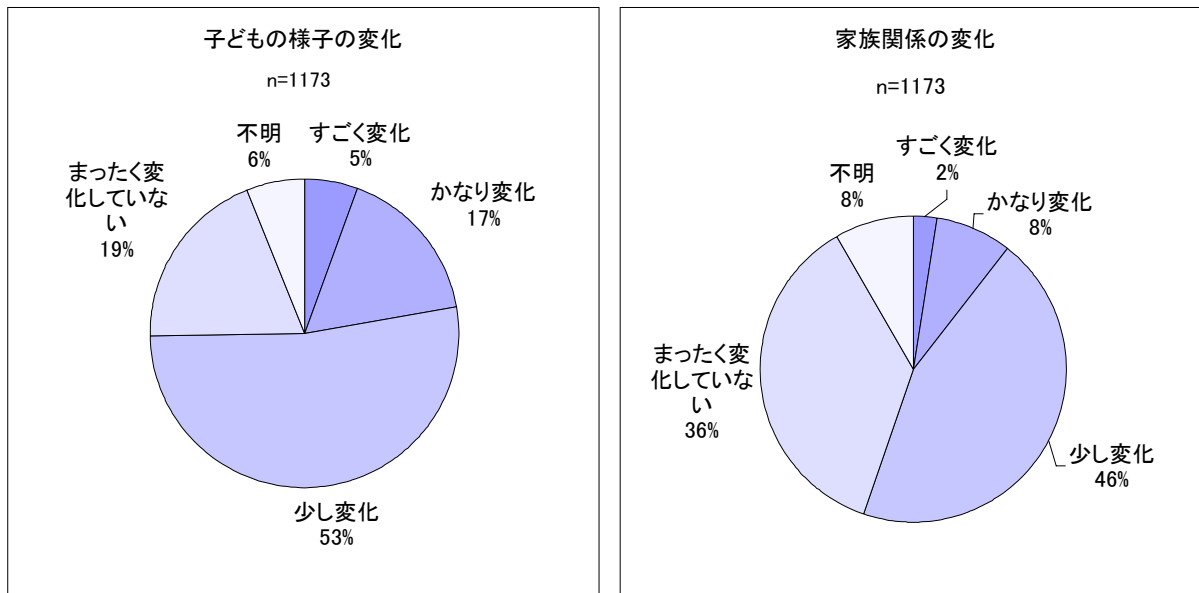
Ⅳ. 保護者の実感としての「居場所」の評価結果

保護者に子どもの居場所に参加しての、「子どもの様子の変化」を聞いたところ、「すごく変化した」5%、「かなり変化した」17%、「少し変化した」53%と、なっており、約 3/4の保護者が、地域子ども教室に参加することでの子どもの様子の変化を実感している結果となった。

「家族関係の変化については、「すごく変化した」2%、「かなり変化した」8%、「少し変化した」46%と、半数を超える保護者が家族関係の変化を捉えている。同様に子どもの友人関係の変化

については約 7 割の保護者が変化を感じ取っている。

特に、アートプログラムに参加している子どもたちの保護者からは、自己表現に目立った変化があることが自由記述において告げられている。



回答した「1173 人の保護者」が、居場所に参加している子どもの何割に相当するのか、正確には把握できないのだが、兄弟での参加割合と運営者が報告する子どもの平均参加者数から、すべての居場所への参加家庭数はおおよそ 4000 程度と推定され、参加している子ども家庭の約 1 / 4 程度からの評価と見ることができる。

IVの「変化の様子」を 4 段階の強度で聞いた後に、その内容も合わせ問うているのだが、子どもの変化について自由記述があったものは 845 本であった。

この他に、家族の関係についての変化(576 本)、友人関係についての変化(636 本)も聞いているが、非常に多くの保護者が短い記述一つひとつに、親子関係、家庭での情景を的確に描いていると感じる。それは、意味論でも作話でもなく、保護者にとっても「わが子の変化」というリアルな体験が書かせていることが感じられた。

特に多い変化としては、以前にも増して様々な世代の友達が増え、子どもの積極性、コミュニケーションの強さ・技術、自信、やる気、計画性、耐える力、他者へのやさしさ、気遣い、社会性、社交性などが増していることを実感していることがわかった。

次に、その記述の代表的なもの 126 本を親の主観的な「すごく変化した」～「まったく変化していない」(上図)を 4～1 の変化強度に変換して共に抽出した。

V. 保護者が感じる「わが子の様子」の変化

【Lev.4～1 4= まったく変化していない… 1= すごく変化】

	学年	Lev.	子どもの様子の変化内容
1	小5	4	もともと何でもやってみたい方だったので、これといって変わっていない
3	小4	4	まだ参加してから日が浅いので違いはまだわかりません。でもすごく楽しいと言っています。
4	小2	4	元々開放的な性格なので発散場所が増えて喜んでる感じです。表面的に何か変わったかというところでもない…と言ったところ
5	中3	3	年下の子ども面倒をみることで思いやりが出来てきたように思う
6	中2	3	何か自ら「やらなきゃ」と思っているようすだ
7	中2	3	参加する日が待ち遠しくワクワクしている
8	中2	3	自分を少しずつ出せるようになってきた
9	中2	3	社会性が身についた。色々な事を体験する事ができた。友だちを思いやる気持がもてる様になった
10	中2	3	人間関係が広がった。積極性がでてきた。道具がなくても遊んだり、楽しんだりできる
11	中2	3	中2なのでよくしゃべる方ではありませんが、積極的に活動に参加するようになりました
12	中2	3	本人の様子がおちついてきたような気がする。イライラがなくなってきている。自分から勉強(宿題)するようになった
13	中1	3	学校や身内以外の友達ができたり、大人と接する事はほとんど無いので、良い体験になっていると思う。日本文化について、お行儀について興味を少し持てる様になった
14	小6	3	6年生の子どもは障害のある子どもです。なかなか人に慣れる事がないですが、友達と意識できるように、かかわりが持てはじめています。障害のある子ときょうだいがほとんどの参加者なのできょうだいも今後、学区外の友達ときょうだいであるがゆえのしんどさなど話しやすくなるのではと、今を見ていて感じます
15	小6	3	以前にも増して好奇心が旺盛になった
16	小6	3	学校外の世界を知り、少し自信がついてきた様子
17	小6	3	劇や映画など積極的に見るようになり、自分の意見を持つようになった
18	小6	3	元気になった
19	小6	3	最初のころは面倒だと感じていたようだが最近では言われなくても行くようになり積極性が出て来た。普段やらない事ができるので楽しいようだ
20	小6	3	思考力がついた
21	小6	3	自分で目的を持って行動する事ができるようになった
22	小6	3	自分の意見を言うようになった
23	小6	3	自分の荷物を自分で用意できるようになりました
24	小6	3	人とかかわりを持つことをより楽しんでするようになった
25	小6	3	明るくなった
26	小5	3	あいた時間に宿題をするようになった。自分なりに帰ってからの時間配分がうまくできるようになった
27	小5	3	ちがう学校の友だちができて、視野が広がっている
28	小5	3	異年令の関係を意識するようになった。遊びが広がった
29	小5	3	一緒に参加するのが、女の子のため、以前は「女とは・・・」と言っていたが、仲良く話しをするようになり、その子に頼っている様子が見られる。帰ってテレビを見ていた(必ず見たいと言っていた)時間に参加し、その方が楽しいと思うようになってきた
30	小5	3	歌を歌う事が楽しめるようになった。声がきれいになった

31	小5	3	教室に関わることで年令のちがう友達がふえ、学校・家庭以外に自分を出せる所があり、のびのびとしています
32	小5	3	近所の大人の人へのご挨拶が苦手だったのが、キッズクルーの参加をきっかけに自分から挨拶が出来るようになった
33	小5	3	自分で何でも準備し親が思っているよりもしっかりとしていた
34	中1	3	人の気持を考えるようになった。自己表現が大勢の前でもできるようになってきている
35	小5	3	地域の友だちができた
36	小5	3	文化や芸術に興味を持つ様になった
37	小5	3	友達が増えた。態度に変化はあまりない
38	小4	3	ふだん出来ない体験をしてプラスになります
39	小4	3	何かを作りあげる楽しさと達成感を感じている様に思う
40	小4	3	学校であったことの話はあまり家ではしないのに「RQコード・・・」「写真を携帯で・・・」などの話しをしてくれた
41	小4	3	自分のこと(気持その他)を伝えようとするようになった
42	小4	3	終わって帰ってきたら何をしたか、ちゃんと話してくれるようになった
43	小4	3	少し消極的な性格でしたが太鼓を習い始めてから色々経験をさせて頂くことにより、何事に対しても前向きな考え、行動ができる様になった
44	小4	3	親子で過ごす時間が増えたこと、そして共通の話題が増えたこと。おけいこの様子、遊んでいる時の様子を見守ることで子どもの社会性の成長を知ることができて良かったと思う
45	小4	3	太鼓が上手に叩けるようになりたいという目標ができ、それに向かって頑張ろうという前向きな気持ちがでてきた
46	小4	3	特に約束していない時でもそこへ行けば遊べるということで楽しそう
47	小4	3	明るくなった
48	小3	3	3姉妹のため普段家では長女が主導権をにぎっています。子ども教室では異年令の子どもが集まって色々な企画を楽しんでいるので、小3の長女もこの時は5,6年生の高学年の子にリードしてもらい、うれしいようです。反対に小1の妹の方は同学年の子ども達と同様にその場の雰囲気を楽しめているようです。家族でもなくいつもの友達でもない子ども教室で知りあった他校の友達が出来ることによっていくらかコミュニケーション能力も身につけているように思います
49	小3	3	インドアの遊びばかりでしたが同年代のお友達と接し、外遊びをする事ができました
50	小3	3	お料理をする機会が与えられたことで、家でも包丁を持って手伝うことが出来るようになった。また、知らない子どもとも遊べるようになった
51	小3	3	チャレンジ精神が出た
52	小3	3	ものおじせずに大きな声で音読できるようになった
53	小3	3	開始時間と終了時間が遅いので学校から帰ったらすぐに宿題をするようになった。できない日は朝早く起きるなど教室が楽しくて行きたいので自分で時間の使い方を工夫するようになった。いろいろなことに興味を持てるようになった
54	小3	3	学校で好きな事を話すとき、自分の習っているダンスの事を言うようになりました
55	小3	3	楽しそうに覚えた日本舞踊を披露してくれます
56	小3	3	帰宅後、友人や年上の人たちとあそぶことができ、とてもたのしみになっている様子だ。以前は自宅で自分達のみで過ごす事が多かったのが、他の人と多くのかかわりを持ち、他人の気持ちは分かるようになってきているようだ

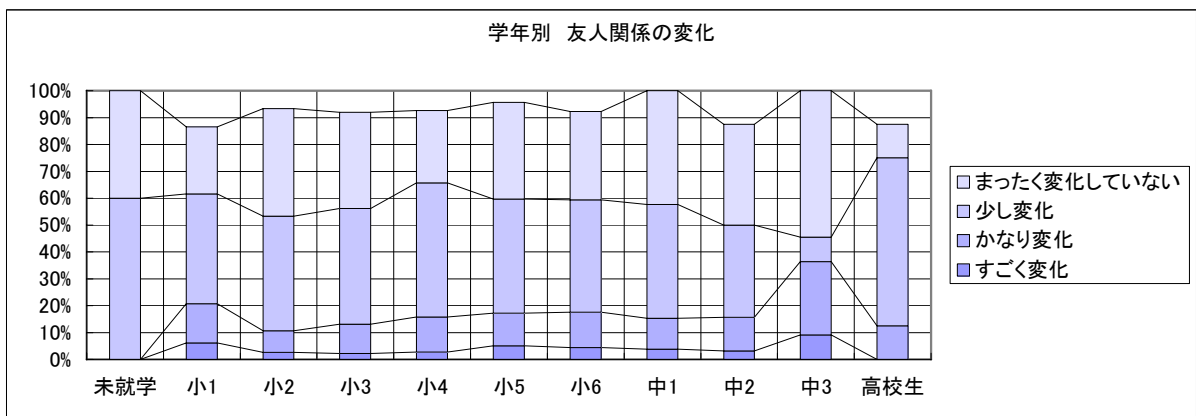
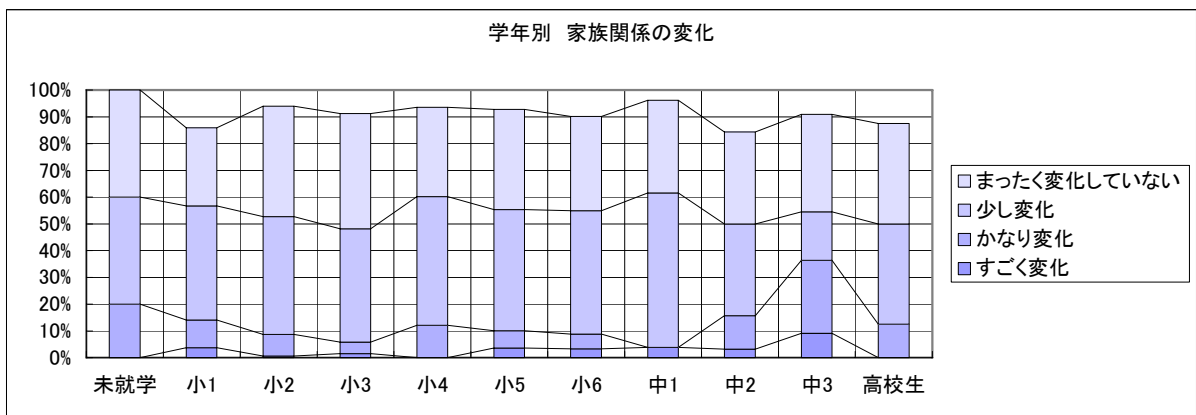
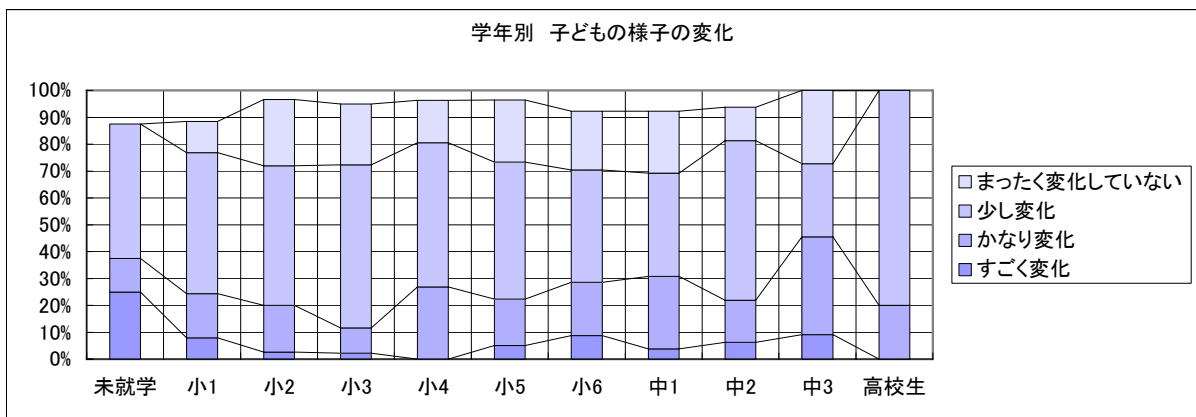
57	小3	3	居場所作りに参加する前は、注意されたりするとすぐ泣いていた子どもが、居場所作りに参加した後では、注意されたら泣いていたけれどもすぐ気持ちを切り替えて一生懸命に物事に取り組んでいる。最初は恥ずかしがっていた子どもが参加するごとに堂々としている姿が変わったなあと親の目から見たら、感じます
58	小3	3	もともと、元気でしたがますます元気に活発になった
59	小3	3	公営の学童保育クラブに通っていた頃は迎えに行ってもいつも一人でしたが、こちらに移ってからは、楽しそうに遊んでいる姿が見られる
60	小3	3	参加する日(火曜日)を楽しみにしていて、その日は他の予定を絶対に入れなくなった(医者や病気の通院の日も外します)。以前は出かけるにしても友達と遊ぶにしても「どっちでも良い」というような曖昧な返事が多かったが、少し減った。
61	小3	3	年下の子と上手く遊んであげる様子がみられるようになった
62	小2	3	お友だちと先生といろいろな体験が出来て楽しそうだと話している。リズム遊びなどはあまり参加したがいなかったけど今回は参加希望回数が増えました
63	小2	3	ダンス教室でしたので教えて下さる講師の方々の方々の技術に少しでも追いつきたい向上心が芽生えてきた様で、ケガ(ねんざ)をして1、2回休んだくらいで毎回参加しています
64	小2	3	以前からいろんな地域の方とのふれ合いを求めるために、公園の方では犬の散歩をしているおじさんおばさん方、ゲートボールの方、シルバーセンターの方、児童館の先生とお友達がいっぱいでしたが、もし、事故や事件にまきこまれたら不安もありました。その点「地域子ども教室」は子、親ともに安心感があり、遊び、出会いのはばが広がった感じです
65	小2	3	学校から帰ってきてすぐに行きたがるので楽しみにしているのはよく分かるが、宿題をしなくて行きたがるので、それは少し困っている。(宿題をしていると行く時間がなくなるとさわぐ)
66	小2	3	少しだけお姉さんになったかなと思います
67	小2	3	人の前で発表する時ドキドキしなくなった。と言っています
68	小2	3	大勢の中で、自己紹介ができるようになった(子どもの意見)学校以外の友だちとコミュニケーションがとれるようになった場を提供してくれてありがとうございます
69	小2	3	途中であきらめず何事にも最後までやりぬく事ができるようになったり、人前で発表したりするのがいけてでしたが、人前で色々な事がはずかしがらずに伝えられるように成長してくれました。参加してよかったと思っています
70	小2	3	毎週火曜日は朝から楽しみにしていることが多くなった
71	小2	3	眠る時間が早くなった
72	小2	3	予定表を見て次回の内容を確認している。楽しみにしており、よろこんで出かけている。
73	小1	3	のびのびと声が出るようになったこと。舞台慣れをしたことで、人の前でもあがらずに話せる
74	小1	3	一日家で過ごしている時はストレスがたまり、イライラしてきますが、参加すると自分のしたいことが自由にできるので、親子ともどもストレス解消になります
75	小1	3	初めて体験して嬉しかったこと、楽しかったことをイキイキと話し、また新しい仲間に出会えて世界が広がっていくところ。次また行きたい!と思う気持
76	小1	3	親がいないほうが良いといわれた
77	小1	3	親と離れて、何かに取り組み、楽しむことにとっても喜びを感じている様子
78	小1	3	大人の男の人が苦手(はずかしくて)な子でしたが松のんと大ちゃんのおかげで免疫ができたようです
79	小1	3	大人の話をきくようになった。それまでは日常的に接するのが父母だけだったのが、「びぶべ」のスタッフの大人たちと接するようになり。いろいろな価値観があることに気づいたように思います

80		3	教室に参加する日を楽しみにしていることで先の予定、曜日などを意識するようになった。”特別なこと””格好いいこと”を教わっているということが自信につながっている
81	中 2	2	地域の中での小さな友人関係以外の広い世界にも目を向けられる様になった
82	中 2	2	発表会を目標に生き生き生活している。生活に張りがでてきたように思う。
83	中 1	2	いろんな子に影響をうけているいろんな事に興味をもつようになった
84	中 1	2	自立心が向上した。家でゴロゴロしている時間がへった
85	中 1	2	真剣に取り組むようになった。いきいきしている
86	小 6	2	何事に対しても積極的になりました。舞台を経験してからだと思います
87	小 6	2	学校とは違う友達が出来て、色々な事を吸収してきます。上下関係も学んで、しっかり自分の気持ちを言葉に出来る様になったと思います
88	小 6	2	考え方がしっかりしてきた。一生懸命努力していた。寝る間を惜しんで台本づくりをしていた
89	小 6	2	根気のない子でしたが、絵付けや型抜きに夢中になっている様子を見てびっくりしています。家に帰っても宿題もあきらめずにやるようになってさらに驚いています
90	小 6	2	最後まであきらめない努力、集中力を養って頂けた
91	小 6	2	自由に自分が表現できて楽しそうです
92	小 6	2	新しい遊びやそこで教わった事を自分の学校の友達とできるようになり、遊びのハバが広がったように思います。あと、努力をするようになりました。「めざす」ということをするようになりました
93	小 6	2	勉強は飽きっぽいのに粘土いじりになると生き生きとして活動している姿に目を見張るものがある
94	小 5	2	レッスンに行くのが楽しみな様です。又、友達とのレッスンやコミュニケーションを大事にしている様です
95	小 5	2	自分の意志を言葉で他人に伝えるようになった
96	小 5	2	自分の好きな事のために努力できるようになった
97	小 5	2	積極的な行動がとれるようになった(リーダーシップ)
98	小 5	2	憧れる、大好きな先生に出会えた
99	小 4	2	いままではゲーム以外では落ち着いて何かに取り組むことはなかったが、教室でできなかったところを家でやるようになって落ち着きが見られるようになった
100	小 4	2	とても楽しみにしており、帰って来てからも生き生きしている
101	小 4	2	生き生きと物事にかかわるようになった 自信を持った。友達とのかかわり方を学び、人間関係を上手く築けるようになった
102	小 4	2	体が弱くて休みがちだったが体力がついたようだ
103	小 4	2	地区を越えて友達が出来、知り合いが増えた。家族で出かけても声をかけてもらって嬉しそうにしている。子どものことを理解してくれている人が多くなった
104	小 3	2	家でTVゲームをしていた時間が減り、友人が増えました
105	小 3	2	興味が広がり、教室であった事をきっかけに、やりたいことがふえ、スポンジのように吸収しているようだ
106	小 3	2	表情が豊かになった。遊びの中で想像力を働かせる事が好きになった
107	小 2	2	お友達に積極的に関わっていけるようになったと思います。親の世代とまた別の世代の先生方と交流できるようになったのがスゴイ！

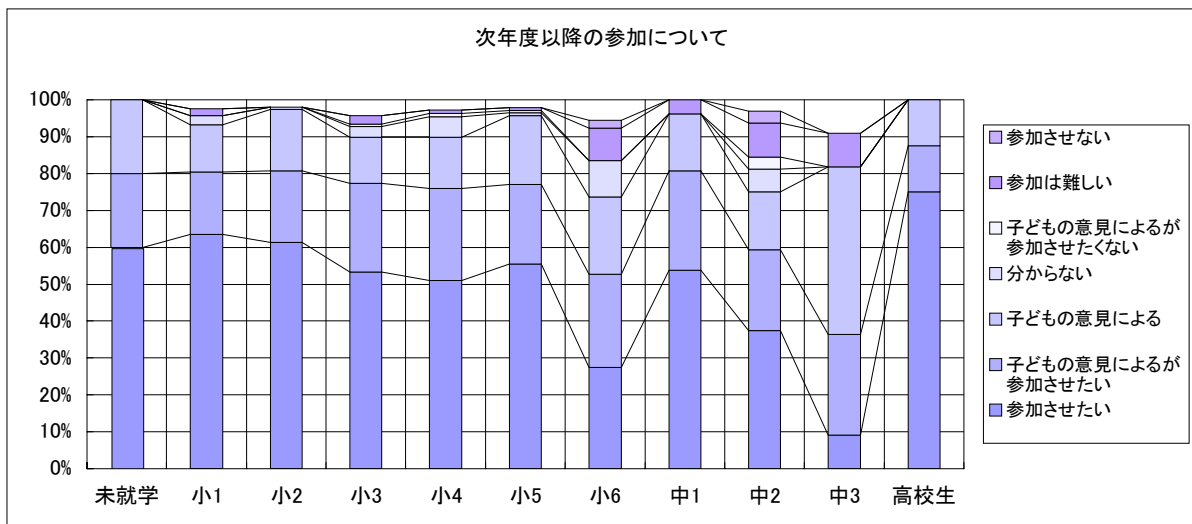
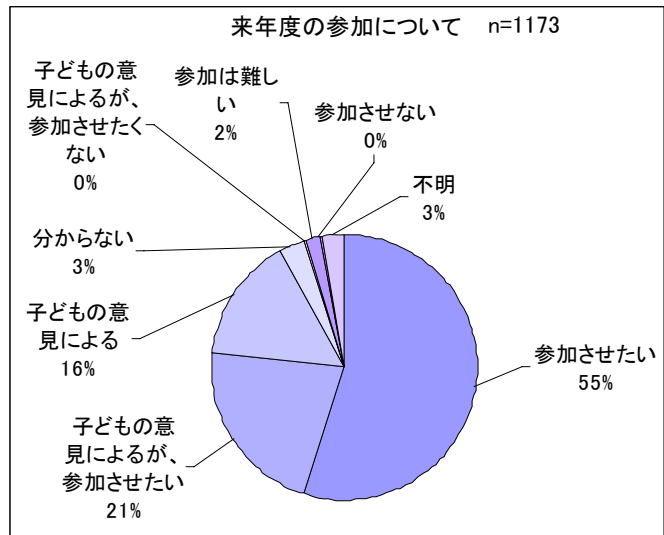
108	小2	2	何をしたのか聞いても以前はよくわからない説明だったが、わかる様に話せるようになった。言葉が豊かになった。以前は恥ずかしくて自分を表現することをためらう傾向があったが表現することを楽しむ様になった。人の気持がわかる様になってきた
109	小2	2	親が行ったら？とすすめていたのが、自分から「来週も行くわ」と積極的になった。だまって友だちの意見にうなずいていたが、「私はココを言いたい」と言えるようになった。学校・クラスでも自分を出せるようになってきた
110	小1	2	(コミュニケーションの障害を持っている子どもなので……) だれ(友達)と何をしたかなどよく話してくれるようになった
111	小1	2	ひとりっこのので他の同級生と共に勉強や製作をすることで、協調性が高まり、物事に積極的に取り組む姿勢が生まれてきた
112	小1	2	学校に入ってから、連絡網もなく、お友達との約束もむずかしく、宿題などもあり、公園などで遊ぶことも極端に少なくなったのですが、あそび隊で子ども同士で思いっきり遊べることも嬉しそうです
113	小1	2	公共機関(交通関係)に乗ることや出かける機会が多くなり機嫌がよくなった。言葉が増えた。他人とのかかわりが自分から少しずつできるようになってきた
114	小1	2	人前で表現、発表する事を恥ずかしがらず取り組めるようになった。仲間意識を持つようになった
115	高3	2	自分の自信と大好きなことができる喜びが見られる
116	中2	1	積極的になった。進んでものごとにとりくむようになった。明るくなった。自信を持つようになった。協力しあって何かを創ることの大切さや喜びを勉強したようです
117	小6	1	学校では緊張があるが地域子ども教室では自分をありのままに出せるようで、生き生きとしている。少しずつ自信がついて学校でも発言するように変化した
118	小6	1	自己アピール出来る様になった。団体に活動する事に消極的だったが、喜んで参加するようになった
119	小5	1	親が体験させてあげられない事を体験させてもらいその体験の中で感じ、想像したりすることで話す内容などが豊かになりました
120	小4	1	本人の本質そのものを受け入れて頂けることにより、潜在能力を引き出してくれた!?
121	小2	1	教室のある日をととても楽しみにしている。教室のある日は宿題をやるのが早くなった
122	小2	1	参加する前は、ひとりで行動することがなかなか出来ず、恥ずかしいのもあって、自分の思うことをあまり話すことが出来なかったが参加するようになって、自分からすすんで参加する様になり、年齢の違う人とも話せるようになった
123	小1	1	15名程の集団の中で自分が受け入れられていると感じられてきたようで精神的に安定した。他の子どもさんとのやりとりでたくましさ身につけた 学校でトラブルをおこして、本人の居場所がなくなった時に唯一、本人が自分らしくいられる場だった。(知的障害ある)
124	小1	1	以前は知らない人ばかりの中に入っていくことすらできなかったのに、自分の興味のある事を楽しく経験でき、自信がついたことで、一人で積極的に参加できるようになりました。
125	小1	1	幼稚園から小学校入学に伴う環境の変化にかなりとまどっている様子でしたが、(入学3日目ぐらいからもう学校に行きたくなかった)放課後あそびの会に見学連れていくと、そのゆったりとした雰囲気が気に入ったのか、自分の居場所を見つけたという感じで自分なりのペースで毎日を過せるようになりました。忙しい毎日の中で自分らしくいられる「ほっ」とスペースを得たことで学校にも適応していくよいきっかけを得ました。感謝です!
126		1	知らない大人のひとと会話ができるようになった。毎月楽しそうです

これらの変化について、子どもは日々成長しており変化するのが当然であるとも言えるが、保護者の目を通じた主観的な評価として、「変化の強度」と自由記述の関係性からは比較的シビアな基準で変化の強度を捉えていることが推察できた。

次に、子どもの変化の強度を学齢ごとに見ると以下のようになった。保護者の自由記述と合わせて以下のグラフを見ると、これまでの学校生活では見られなかった、子どもの変化が「居場所」での体験によって促進されていることが読み取れる。居場所は、単に安全安心の入れ物ではなく、子どもたちの成育に大きく貢献していると言ってよいだろう。



保護者に来年度の参加を聞いたところ、「参加させたい」が55%、「子どもの意見によるが参加させたい」が21%と、明確に意思表示をしている保護者は7割を越えて、子どもの居場所を評価し、期待をしている。反して「参加させない」3名の理由は、「小学生を対象としているから」、「中学生になると部活が忙しくなるから」、「高校受験だから」が各1名。「子どもの意見によるが参加させたくない」4名中2名は、友人関係の変化がすごく変化した「よその学校でのできごとや話題にすごく興味を持って、よく両親にも話をしてくれるようになった」と評価しながら「仕事の都合で送り迎えが難しい」とする1名、「年上の友人が増え、知らない子どももすぐ友達になれる自信がついたようだ」としながら「来年は受験生なので」と、1173名中2名の空欄を除いて、評価は高い。また、中学生の参加への保護者からの評価に見るように、中学生にとっても新たな意味での子どもの居場所の可能性が展開することが予想される。



そして、今回の集約には掲載できなかったのだが、自分の子どもが今後、参加する・しないにかかわらず、「地域の子どもの居場所」についての保護者の考えを求めたところ、こうした「子どもの居場所」の必要性、意義を深く捉えた意見の多さに圧倒された。その居場所において求められるのは、多くの運営者、指導員もミッションとしてかかげる、子どもたちのありのままを受け入れ、自尊心を育み、地域社会の人と人がかかわることを肯定的に捉えられるような関係が築かれる関係を求め、もっと身近に、当たり前のこととして子どもたちが集える、利用できる時間と空間を求めている

ことがわかった。子どもたちにとって、また保護者にとって、「子どもの居場所」が今ほど求められている時代はないことが、これまでの調査研究によって明らかになったと言ってよいだろう。こうした保護者の意見は、先に見たわが子の変化を実感として捉えての言葉であり、空論ではない、実現可能な取り組みとして求めていることを改めて明記しておきたい。

【まとめ担当 稲垣 秀一】

第四章

指 導 員

第四章 指導員

指導員 880 人の回答より

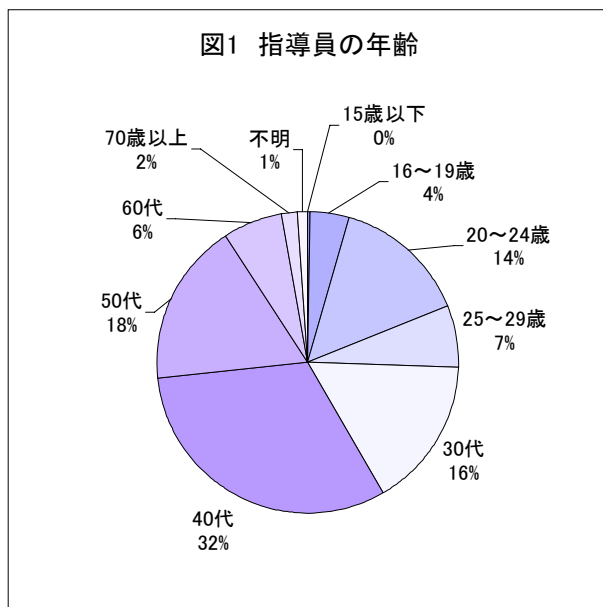
本アンケートでは、おとなのスタッフ(高校生年代以上)としてこの事業に関わる人たちを対象に、①どのような人材が参加しているか ②地域での子どもとおとなの関わり ③指導員の「子ども観」について調査し、約半年の実施経験の中で、指導員の目線から見えてきた成果や課題について明らかにしたいと考えた。有効回答数は 880 本であった。以下、アンケートの結果と特徴的な点について報告する。

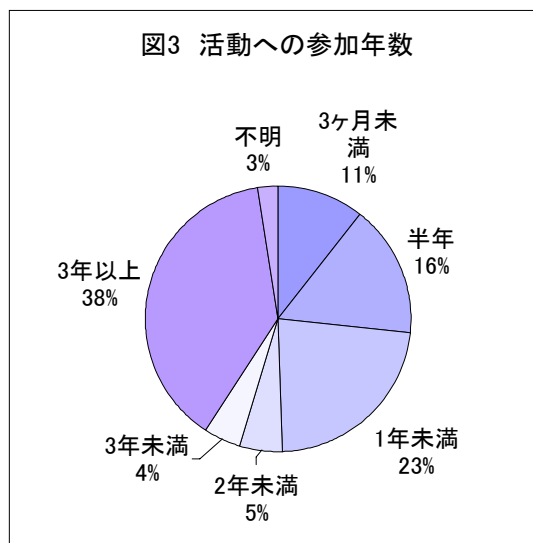
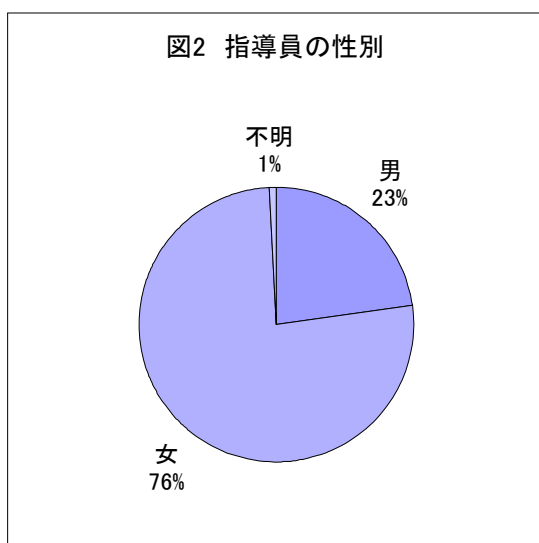
尚、本アンケートでは、当事業において事業実施団体ごとに、「指導員」「グループリーダー」「ボランティアスタッフ」「ファシリテーター」などの呼称で位置づけられているスタッフを、有償・無償に関わらずすべて「指導員」として回答を求めた。

I. 参加した指導員の姿

(1) 指導員の属性

回答者の属性（年齢層、性別、活動での経験年数）は次の通りであった。





主な活動時間が平日の放課後にあたるため、参加の中心は主婦層が担っているが、16歳から80歳代までの幅広い年代が関わっており、全体の47%がこうした事業（または前身となる活動）に、1年以上前から参加していると回答している。

●人材募集の工夫について

こうした人材が、地域からどのように集められたかに関する自由記述では、

- ・ 退職者を巻き込むことで世代交流の場として位置づける
- ・ 学生の参加を募り次世代の親支援につなげる
- ・ 参加者の保護者を積極的に巻き込み、親世代の交流・共育を図る
- ・ 公共のボランティアセンターなどの活用で幅広い人材を募集する

など、地域性によって様々なアプローチがなされている。

●子どもに関わるキャリアについて—約6割が「あり」—

また、「子どもに関わる」分野の学歴・職歴・活動歴や資格では、全体の57%が「ある」と回答しており、これまで何らかの専門性をもって子どもに関わっていた人達が、その経験を地域で生かす場として事業に参加していることがうかがえる。

他方、特別な専門性や活動歴がなくても「地域の子どものために」という志で参加する人の層が厚いことも、民間（NPO）で実施する特徴を現していると考えられる。

●多様な人材のかかわりを得て実施

「得意なことはなんですか？」という質問に対し、「子どもと遊ぶこと」「話を聞くこと」「のんびりすごすこと」などの回答が多く見られ、「学校でも家庭でもない場所で子どもに関わるおとな」として、遊びや休息のありかたに配慮し、受容と共感の精神を大切にしていることが感じられる。また、一見子どもの活動に関連がなさそうな趣味や特技を挙げている場合も、その趣味や特技が様々な活動に反映されていることがわかる。

例) 指編み、ギター、ソフトボール、野外での活動、クラフト、ベーゴマ、歌、遊び、パソコン技術、料理、マジック、笑い、工作、ビデオ撮影&編集、折り紙、絵を描く、人の話をきくこと、野菜づくり、お喋り、人形劇、レーシングドライバー…

これらのことから、地域の多様な人材が「子ども」を軸に、本事業では、地域のおとなたちがそれぞれの得意なものを持ちより、人と人が出会う空間・時間をつくる試みとして実践されていることが裏付けられる。

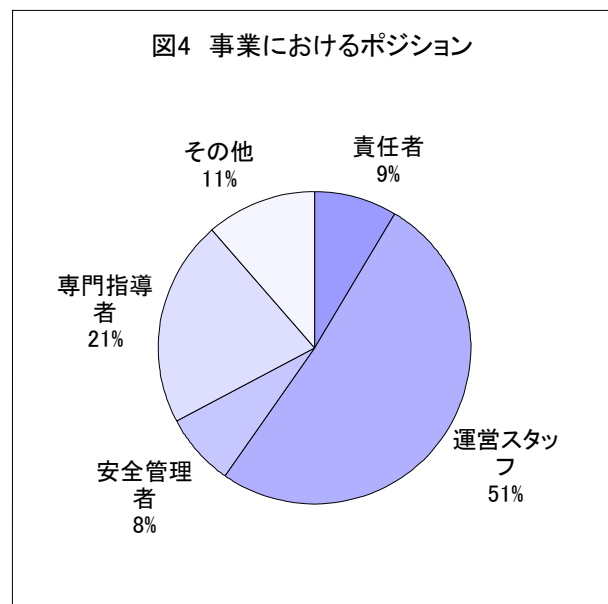
参加する子どもたちにとって、多様な価値観に触れる機会になっていると同時に、かつては隣近所のかかわりの中で認め合ってきた「おとな自身のアイデンティティ」が、地域子ども教室という場作りを通じて、地域で共有されていく側面があるといえるかもしれない。

(2) 実施体制と位置づけ

事業の実施体制を大別すると、家庭的な雰囲気の中でノンプログラムの「居場所」を保障するパターンと、イベント的なパターンにわけることができる。（「運営者のアンケート」参照）

ノンプログラムの場合と比較すると、固定されたメンバーが定期に集まる活動内容（演劇やダンスのワークショップなど）では、一人の指導員が担当する子どもの数が多くなっていることも興味深い。

事業のなかでの自分のポジションでは、一人で複数回答するケースも多くみられた。事業ごとのスタッフの呼び名や位置づけと設問の選択肢が一致しなかったことなどで、無回答・不明を含むその他も11%あった。



●参加の動機について—2割が「子どもが好き・関心がある」から—

指導員の参加の動機・きっかけでは、友人・知人からの紹介24%、または実施団体との関連をあげる人が全体の20%となっており、人を介して活動に参加するケースが

最も多い。また、同じような活動をしてきたから 10%、勉強の一環 4%などの回答もみられる。

アンケートは、16 項の選択肢に対して第 3 位までを問う形式だったが、有効回答数の内、「子どもが好き」11%「子どもに関心がある」9%をあわせると全体の 20%をしめており、当然のことながら参加する個人の気持ちの中に、事業の主旨に共感する基盤があったと考えられる。

事業の主旨・目的や成果についての共有は、「知らない」2% に対し、「知っている」「説明を受けたことがある」「理解している」が全体の 72%である。上記の基盤があるならば、今後の事業実施を通じてさらに多くの人が、いっそう深い「共感・賛同」（現 26%）にシフトして行くのではないかと考えられる。

II. 評価と課題 一子どもとのかかわりの中で一

(1) 参加してよかった点

事業に参加してよかった点を複数回答で尋ねた。結果は上位から「子どもによい体験の場を提供できた (403)」が約半数。続いて「子どもについての発見があった (365)」「人間関係がひろがった (326)」が選択された。自由記述で具体的な内容をたずねた。以下に一部を抜粋する。

●子どもにとって

年齢	性別	記述内容
23 歳	女性	普段触れることのない和楽器や民舞を体験し、表現の楽しさを感じることができたと思う。さらに他学年、他の学校の子供たちとも交流を通してコミュニケーション能力向上を図ることができた。
42 歳	男性	ナイフなどを持ったことのない子どもが多く、自分で物を作るという経験ができたのではないかとと思う
28 歳	女性	こどもたちが、演劇的手法により、ゲームなどを通して体をしだいに解放して表現する楽しさを身につけていったように思う。
54 歳	男性	発見というよりは再発見というべきかも知れません。身近な自然観察や創作活動の中で、おとなの側の意図を超えた行動があること、そしてそれが受け入れられるとわかると、さらに積極性が増していく。
39 歳	女性	一人ではできない事でも、集団で遊ぶことによって子どもたちもいろんな体験ができると思う。年齢の違う子どもたちと関わることも学校ではあまりないので、良いと思う。
51 歳	男性	当初の直感以上に子ども達が熱心に通ってくる。自分の経験ではもっと学校の友達と遊んでいた気がするが、今の子ども達は学校を離れると如何にバラバラか実感した。同時にそういう子ども達に新しい集合の場を提供できたと思う。
46 歳	男性	中学生が自立的に参加できる場は少ない。とくに文化活動の部活が少なくなっているようで、いい場となっている

●指導員にとって

22 歳	女性	子どもらしい目線や発見がとてもおもしろいと思った。
33 歳	女性	子どもたちが普段の生活の中で考えたり思ったりしたことを折に触れて会話する事で、歩み寄ることができる。子どもたちが秘めているエネルギーは（特に本番のステージでは）おとなの想像をこえる。
63 歳	女性	今を生きている小学生たちが直に感じとれています。学校との自分、友達との自分、親との自分、先生との自分、地域の中の自分…子どもたち一人一人考え方はもちろん様々ですが、今どんなことが楽しくて、どんなことが億劫で、どんなことが流行ってて、そんな今の小学生の姿に接する度、新鮮に感じています。
21 歳	女性	今まで、子どもがきらいでした。ちょっとしたきっかけで知人にさそわれて行くとても楽しく入ることにしました。そこで子ども達と関わる中でとまどうこともたくさんありましたが、子どもってかわいくなって心から思えるようになりました。私達が普段生活する中で気づかないことに気づいたり…この活動を機に免許を取り始め、4月からは教員として働くことになりました。私の人生を大きく変えてくれた。
20 歳	男性	地域教室で見せる子どもの姿は、学校での姿とは違ってとてもはつらつとしており、子どもの見方や触れあいかたに幅ももてた。また大学で学んだことについての実践の場があるので、一日一日が発見でとてもいい経験になる。
24 歳	女性	人とのかかわりによって伝統芸能の基本を知り、多くの人々とわかちあって、助け合って、おそわって、それを身につけて、次につなげていきたいと思う心をもった。次は私が多くの人たちに伝えていける技術と知識と人間性を持っていきたい。
16 歳	女性	あんなイキイキした笑顔をするなんて知らなかった。

●地域にとって

48 歳	女性	閑静な住宅地に集う場所ができ、子ども達の笑い顔、笑い声が聞こえ、町に活気が出てきました。近隣に住むお年寄達は子どもとのふれあいを楽しみにしております。
22 歳	女性	地域の子どもの目を見る目をじかに見ることができた。子どもの存在だけで、顔の表情がやわらかくなると感じた。
49 歳	女性	市内の他の市民団体と協力して場作りができ、今後も関わっていけそうなのでネットワークが増えた。
51 歳	女性	地域の中で、各々が活動していた団体同士のネットワークづくりにむけて、まず一歩踏み出せそうである。(市内の子ども教室との連携)教育委員会とは残念ながら、まだ、関係づくりは進んでいないが「次世代支援地域行動計画」から児童家庭課とは連携しはじめた

他、さまざまな感想が自由記述でよせられた。

特に、高校生年代から 20 歳代にかけての年齢層の記述に、子どもとのかかわり、地域とのかかわりを通じて、発見があったという記述が多く見られ、「次世代の親」への支援という側面で、大きな効果が期待できることが明らかになった。

● おとなにとっても意義のある活動として

約半年の実施を経て、子どもとの関わりを体験したおとなの評価としては、この事業に参加することが

- ・ 子どもの可能性や感性の鋭さなど「子どもの持つ力のすばらしさ」の確認につながる。
- ・ 指導員自身についての発見やがある。
- ・ 地域での人と人のつながりをつくりあう場として意義深いものになっている。

などであることが、本アンケートによって確かめられたといえる。

しかし、そのことが子どもたちにとってどうだったのか。どの様に影響し、どのように子どもの地域生活を変える力を発揮して行くのかについては、今後の継続のなかでさらに調査・研修をすすめていきたい。

(2) 課題と感じていること

指導員の抱える課題を抽出し、共有するために「この事業に参加して辛い（いやだ）と思う点」を尋ねた。40%が「特にない」を選択し、具体的な事例を問う自由記述には「難しさ、解決しなければならない問題はあるが辛いとは思わない」という内容が数多く見られた。

●多くの役割を少数で担う実態

しかし、参加の頻度が高い人ほど「活動を休めない」、活動でのポジションで責任が重いほど「活動時間以外の生活との調整がたいへん」といった回答が多く、一人の人が複数の役割を担う場合や、指導員の人数が限られていたり、他の職をもちながら事業に関わる時間(企画・準備から振り返りまでを含む)のやりくりに苦心している姿が浮かぶ。

●地域・学校との連携に課題

また、地域や社会での理解が得られないという回答では、「学校を借りられない」「学校で事業のチラシを配布できない」「PTA や地縁団体との連携がはかれない」などが挙げられており、今後は実施団体独自で地域の連携を模索することとあわせて、「地域子ども教室」という事業（もしくはNPOが事業を実施する意義）の社会的な周知が必要である。

「辛い」「難しい」「苦手と感ずることやわからない」ことを尋ねる自由記述では、あわせて630人が解答している。（複数回答）

年齢	性別	記述内容
24歳	女性	特定の子どもグループと遊んでいる時に、他の子どもを見る余裕がないこと。遊びたい時にアクションをとるのが苦手な子の意思をくみとること
	男性	「教室」のように全員をしばって好きでもキライでもとにかくみんないっしょにやろうというのではないので、どうしてもサッカーや、もっと普通の遊びのほうがいいと言うのであれば、無理矢理ここで参加してもらったこともないと思っただが、とは言え「出てっいいよ」と言うわけにも行かず、しばしば大声を上げざるを得ないの

		は心苦しい。
19 歳	女性	どういう時に注意したらいいのか、どんなふうに参加したらよいか。
23 歳	男性	集中力を持続させるのが難しい。プログラムが円滑に進まないこともある。
39 歳	女性	ボランティアの要素が高いので、収入を得る仕事を別に考えねばならず、そちらの仕事との両立が難しい。
41 歳	男性	子どもたちが自分から発見したり、感じたモノを自分自身のアイデアで演技するまで、「待ってあげる」姿勢をキープする事。我慢しながら個性を引き出す事。
42 歳	女性	子ども達はとても忙しく、時間がつくれず参加できない場合が多いのが残念

など、関わり方や集団づくりについて多くの悩みが寄せられた。

特に、20 歳代までの多くが「けんかの仲裁」「しかり方」「子どもとのルール作り」「言葉のかけ方」「子どもの興味を引き出す方法」など、具体的な「子どもとの関わり方」について「難しい」と感じていることがわかる。また、そのことは前述の「参加してよかったこと」の項との関連で、子どもと関わる中で「学ぶことが多かった」「発見があった」とする回答と表裏の関係にあることが読み取れる。

● 事業に参加して学んだこと —6 割強による自由記述から—

また、この事業で「学んだこと」については、541 人が回答している。

36 歳	女性	本当に子どもは一人一人様々だということ。子ども同士、どんどん関わり合い、学んだりしているということ。
44 歳	男性	積極的に映像撮影に関わってくるわけでもなく、室内で漫画を読んでいる男の子がいるが、毎回、出席している。興味が無いのかと思っていたら、物語りのセリフの多くをしっかりと覚えていることに驚かされた。その空間に存在しただけの子供もいるんだとわかった。
29 歳	女性	活動回数を重ねるごとに、子ども達の変化(成長)がどんどん実感としてみえてくる。自主性がでてきている。子ども達の姿勢に色々な可能性のあることが見えてきて、逆におとながその可能性にストップ(歯止め)をかけている様にも感じている。
43 歳	女性	たかが鬼ごっこ。されど鬼ごっこ。そこにはまちがいない”社会”がある。
21 歳	女性	これまで自分が障害をもつ人に対して、どういう風にみていたか、どれほど自分勝手な考え方をしていたか、人と人が共感することについて、障害は関係ないこと。
55 歳	女性	子ども達の日常は、安全に、楽しく、豊かに過せるという事とは程遠い所にあることなど、おとなの側の体制作りが必要だと痛感しました。
21 歳	女性	子どもにアドバイスする際、子どもが自分で考え、答えを出すまで待つことが大切だということ
25 歳	男性	演劇のメソッドが子どもたちへの教育の一環として、効果がある、またはその可能性が見いだせたのはもちろんだが、その他に自分と子どもたちの距離というか、自分たち 4 人の指導員の中で自分が一番子どもたちに近い存在であることが判明した。年齢のせいもあるだろうし、突き放すわけではないが、自分ももっとおとなにならなくてはと感じた。

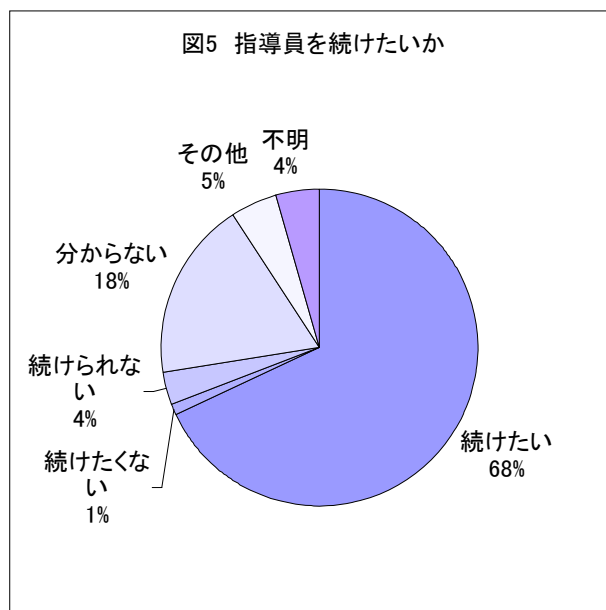
35 歳	女性	子どもの成長を長い目でみる事。参加している子ども達の様子からも、また、様々な年齢層の子どもを持つほかの指導員の話からも学ぶことが出来た。
54 歳	男性	身近な自然の中でも、様々な発見があること、おかげで今年の紅葉、黄葉の美しさは抜群だった。子どもたちがありのままにものを見ているという感じを、少しは理解できた気がする。

他、沢山の声があり、子どもから学ぶことの楽しさやすばらしさ、子どもを通じて知る社会の現状について、貴重な発言が寄せられている。

Ⅲ. 安定して継続するために

●継続の希望は 7 割

継続についての設問では、71%という多くの人が「今後も指導員を続けたい」と意思表示している。この事業が地域にとって必要なだけでなく、参加した指導員にとっても意義や充実感を感じられる取り組みであるといえよう。



(1) 情報共有・研修の必要性

情報の共有は、各種の工夫がされていることがわかる。しかし、活動前後(前、後、または前後とも)の打合せは最も活用されているが、紙ベースやネットベースなど、情報の視覚化・記録化とあわせた実施は少ない。

アンケートでは活動記録について調査する項目はなかったが、今後安定した運営につなげるためには、指導員同士による、情報の共有と蓄積は必須である。各実施団体において、活動にみあった情報共有と記録の手立てを確立していく必要があると考えられる。

●さらに、学びの場を

研修については、「必要は感じているが、機会がなく、実施団体独自の研修を用意しているケースは極めて少ない」といえる。

必要と思われる研修内容には、大きく分けて次の 5 点があげられていた。

- ・ **安全管理** (リスクマネジメント、応急救護の知識・技法、災害・緊急時対応、子どもとの危険予測、保護者との共通理解 など)

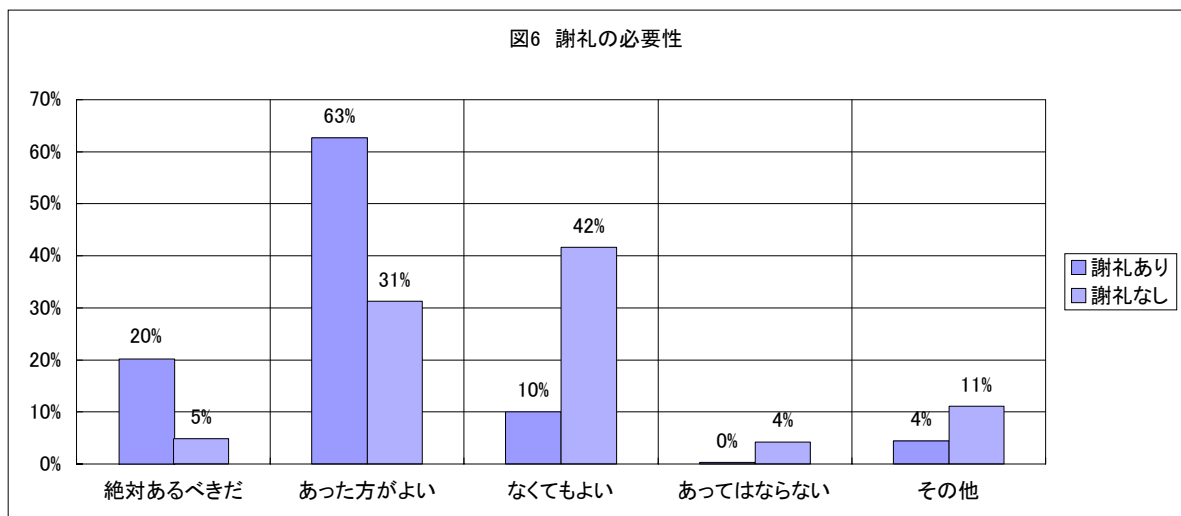
- ・ **子どもとの関わり方**(受容・共感の技法、言葉かけ、指導のありかた、子どもの背景理解、子どもをとりまく社会状況の学習、集団作りについて など)
- ・ **プログラムに関して**(企画立案、プログラム運営、技法の修得、情報の収集 など)
- ・ **運営面**(ボランティアマネジメント、周知・広報、地域との連携、資金調達 など)
- ・ **活動実績の交流**

団体独自で研修の機会を提供することは難しく、研修機会の保障を求める意見がみられた。

(2) 指導員への謝礼

今回のアンケートは、80%が有償でこの事業へ参加していることがわかった。しかし、「謝礼」の中味は、「活動にかかる経費」の弁済程度～時給1,000円以上まで、または日給制(平均4,091円)と、活動内容や指導員の担当する役割の違いによって様々な設定となっている。

謝礼の必要度について、謝礼が「ある」場合と「ない」場合に分けてクロス集計を試みた。



謝礼をもらっている人の中に「なくてもよい」と思う人が10%、謝礼のない人の中で「絶対あるべき」「あったほうがよい」があわせて36%あることから、謝礼の設定について受け入れる団体と参加する個人のコンセンサスが必要と思われる。

●活動を続ける基盤となる謝礼の必要性

「その他」の自由記述では、「謝礼は、なくてもよいが継続や責任を考えると、あったほうがよい」または「自分はなくてもやれたが、今後人の広がりをつくるにはあったほうがよい」という回答がよせられた。

謝礼について「絶対あるべきだ」「あったほうがよい」と答えた人に対して、妥当と思われる金額を尋ねた。前述した実際の支給額ともあわせて分析すると、講師などプログラムの企画・運営に関わる人ほど高く、見守りや補助指導員は無償ボランティアの傾向が高い。また、時給制では800円未満が（500円未満を合わせて）36%、日給制では3,000円未満が42%と最も多く、実施日数や時間数との関連では「ボランティアバイト」的な感覚で関わる人が中心であるといえる。

実施実態、金額の妥当性の両面から、多くの人がこの事業に関わることに「多くの収入は望まないが、継続や責任あるかかわりを保障するために、一定の謝礼が必要」と考えていることがわかる。

一方で、運営に関わるメンバーの中には「誰かが責任を持って日常的に関わらなければ事業自体が成り立たないのに、財政的に安定して関われるだけの基盤がない」として、この事業のマネジメントの厳しさを訴える声も複数あげられていた。

委託事業後終了後の継続を見通して、経費（特に指導員への保障にあてられる収入源）の確保をしていくためには、全国的な連携による運動と地域での工夫の両面が求められている。

IV. 「指導」から「支援」「共育」へ

これからやってみたい企画や子どもへのアプローチ、特徴的と思うプログラムについては、さまざまアイデアや事例が寄せられた。この調査とは別にプログラム事例集などを作成して、情報の共有をはかり、今後の事業に生かしていければと考える。

●思い描く指導員像

「子どもにとってどのような指導員でありたいか」の自由記述では

- ・ 子どもと共に考え発見(成長) できる人でありたい。指導ではなく、その場、そのときを共有する楽しめる人。
- ・ 信頼される。子どもを第一に考える。子どもを全身で受け止める。
- ・ 子ども達が自由に学び、考え、自発的に行動できる環境を作ること

など、指導・支援のあり方に関わる記述が多く見られた。

記述の中で「～と思われるような指導員」「子どもから～と見られる人」という表現がしばしば見られることが気になった。設問の言葉遣いとの関連もあろうが、特にユース世代の自己認識として、他人からの評価を気にする傾向があることと関連があるかもしれない。（「子どものアンケート」集計結果参照）

しかし多くの人々が、自己研鑽を重ねて、子どもと共に学びながら、楽しみながら、子どもが安心して過せる地域をつくりたい。何かしら自分の関われることを見つけて子ど

もとのかかわりをつづけていきたい。と考えていることが汲みとれる。

●週末チャレンジ事業におけるおとなのかかわり

週末チャレンジ教室では、「芸術・芸能」や「伝統芸能」「もの作り」「スポーツ」などに関わる専門性や活動暦を持つ人が講師として参加している。しかし、活動に参加するおとなは必ずしも専門家のみではなく、専門家と子どもたちをつなぐコーディネーターや、プログラムをかみくだいて伝えるファシリテーターも必要とされている。また専門家である講師自身がそれらの役割も引き受けている場合もあった。

「難しいと感じること」で、「子どもの集中力の欠如」「プログラムにひきつけておくことの難しさ」をあげているのは、ノンプログラム型と比較したとき、プログラム中心型の事業に多くなっている。また「参加する子どもの年齢幅がある中で、それぞれの個性をどう大切にしていけばいいのか」という戸惑いも浮かび上がってきた。

子どもの今を受け止める「居場所」としての役割と、製作や共同作業を介してコミュニケーションや表現の体験を行おうとするプログラムの質の違いの中で、子どもとおとな（指導者）の位置関係の差が難しさとして現れていると考えられる。

これらの問題点については、子どもの実態の把握や、子どもと指導員の人数比の検討が必要である。また、プログラムマネジメントの段階で、プログラムの目指すものや、参加する子どもの情報について指導員同士が認識を一致させておくことも重要であると考えられ、また前述の「ファシリテーター」の役割も大きく関与すると思われる。

居場所で実施するプログラムは、一般の「習い事」や成果の発表を主眼にした「〇〇教室」と、どの様に違うのか。何を目指すのかについて、今後改めて議論を深めたい。

また、専門性を持った人材を講師として迎える場合には、（指導員本人の気持ちはボランティアであったとしても）一定の謝礼を払うべきという認識が浸透してきていると考えられる。

「地域の人だから」「子どものためのボランティアだから」ということを理由に、無償でその人のもつソフトを提供し続ければ、活動は枯渇し、継続できなくなる。今回、委託事業経費として講師謝礼を計上できたことは、大きな意味があったといえる。

「地域子ども教室推進事業」には、**地域のおとなたちの教育力を集結**するとして、社会教育団体、高齢者、退職教員など地域の人材を集結し、ボランティアとして登録、協力を求めること。また地域の公民館、児童館、NPO、NGO、商店街、等、関係機関や組織が連携協力して、子ども教室を支援することが求められている。

全国民間団体運営連絡協議会は、**指導員 66,248 人(延べ)、ボランティアスタッフ 71,587 人(延べ)**の参加を得て実施したが、本アンケートには、さまざまな地域で多様なかわりをもつおとなたちの生の声として、「子どもを真ん中にすえて地域社会にかかわっていけるリーダー」として活動を続けたい。『子どもの権利条約』に謳われている「子どもにとって最善の利益」を地域生活へ根付かせることができるように、今後も関わる人のひろがりをつくりながら、事業を継続していきたいという、熱い思いが感じられた。

【まとめ担当 竹内 香織】

第五章

運 營 者

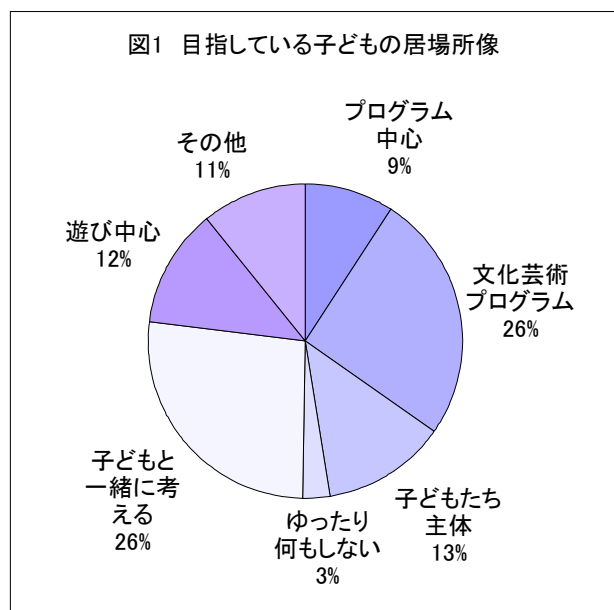
「子どもの居場所」運営者 266 人の回答より

I. プログラム型とノンプログラム型が半々

「地域子ども教室」の企画を大きく分けると、プログラム型とノンプログラム型とに分けることができる。プログラム型を志向している運営者の目指しているものを記述してもらくと、プログラムを通して、「一つのものを完成させる達成感を味合わせる」「表現力、集中力、創造力を養う」「コミュニケーション能力を育む」「日本の文化を学ぶ」「社会力をつけ思いやりや助け合う喜びを育てる」など、子どもに何を獲得させたいのか目指すところを明確にしている。

プログラム型の中では文化芸術活動が1/2を占めているが、その内容は、演劇表現ワークショップ、人形劇、ダンス、歌、リズム、和楽器、アートと広がっている。その他のプログラムとか、子ども主体のプログラムではスポーツ、料理、ものづくり、あそびと多岐に渡っているが、「料理」に子どもたちの興味と関心が寄せられている状況が多くあった。

一方、ノンプログラム型では、何もしないゆったりした時間を保障する「場」を提供することを目指しているが、集まった子どもたちが仲間になるきっかけとして「回を追う毎にある程度用意するようになった」という記述もあった。また、「友だちがやるのに触発されてやるようになり、継続してやるようになることも多い」という記述や、「子どもたちが集まった時、自由に参加するプログラムやあそびが自然発生的に生まれることは当然あること」と、子どもたちの主体性に期待をしている向きも見受けられる。ノンプログラム型は、あくまでも子どもたちが主体性を持って参加することと、指導員が子どもと一緒に考えることを重要視している。活動内容は季節に因んだものやあそびが多岐多彩に開催されており、そこに運営者や指導員のファシリテーターとしての関わりが感じられる。【図1】



II. 居場所づくりのビジョン・目的

こうした実施の手法、スタイルを通じて、それぞれの子どもの居場所づくり事業では何を目的としているのか、そのビジョンを各運営者にたずねた(前項 239 事業の「ビジョン・目的」)。

各居場所が目指すものは、それぞれ多様であるが、その自由記述を読み込んでいくと、民間による地域に根ざそうとする居場所に、いくつかの共通する「地域観」「子ども観」といったものが浮かび上がってきた。以下にその特徴をまとめた。

① 子どもたちに期待すること

「たくさんの仲間と関わることで、自分を表現しコミュニケーション能力を高める」という内容を目的にする居場所づくりが多く見られた。他者と関わり、コミュニケーションする楽しさを知ること、自分も他者も大切な存在であることに気づいていく。自分を好きになることが人を信頼することができることでもある。様々なプログラムを通して、友達をつくる力、異年齢集団を築いていく力、考えることができる力が期待されている。

また、子どもにとって、「遊ぶこと」は欠かせない重要な要素と捉えられている。遊びの中から学ぶことを大切にし、子ども自身の達成感・充実感を大切にする。それは子どもの成長・自立を助け、安心してチャレンジする心を育てることを可能にすると、考える居場所も多く見られた。

② 子どもが集う場としての人間環境づくり

場所(スペース・空間)としての「子どもの居場所」をつくるだけでなく、表現する楽しさ、仲間と活動することによって人として成長するといったことを子どもに働きかける一方で、それを実現できる環境として、おとな自身のあり方や資質、関係性を変えていくといった場づくりがイメージされていることがうかがえる。

日常のストレスから解放され、子どもたちがほっとできる場を提供する。子どもたちにとっては安心してゆったりといられる場所で、そこでは自信を持って自分を表現することができる。子ども同士あるいは子どもと大人が良い関係をつくり、その関係性を通して地域ぐるみで子どもの成長を見守る、子どもが安心して暮らせる、あたたかい地域社会の構築を目指している。

放課後に子どもたちが自由に立ち寄れる、寄ってみたいくなる場所で、子どもたちの生活圏にあり、子どもたちを見守る大人がいる。子どもたちにとっては、自分をそのまま受け入れてくれる場であって初めて安心感を持つことが出来る。学校ではできないレベルで一人ひとりを受け止めてくれる、オリジナリティを發揮できる場である。今や家庭、学校ではない本音が出せる安心して集まることができる地域の居場所が求められている。

いろいろな人と出会い関わることで人間形成をすすめる、学校や家庭で味わえない楽しいことを体験することができる。いろいろな体験をすることで、子どもたちは世界が広がり、自然を心と身体

で感じることを可能にする。人とのかかわりが楽しいと思え、興味関心が満たされる場である。

③ 子どもに関心をもつコミュニティづくり、地域づくり

一方、「居場所」内へのビジョンと同時に、その居場所が存立する地域そのものへのアプローチをビジョンに挙げる回答も少なからず見られた。

子どもの居場所が、子どもたちのコミュニケーション能力や表現力を育てるといった、可能性を広げ生きる力を育てることから、子どもたちが地域社会になじむ、つながりを強める、学ぶといった言葉にあるように、地域・地域社会の中で子どもたちが育っていくことへ発想が広がっている。

地域の居場所として、子どもたちにとって行きやすい場所に、子どものありのままを認める大人たちがいて、その子ども観を地域社会全体に広げていくことをすすめ、子どもが安心して育つ地域づくりへと繋がっていくことが求められていると理解できる。

子どもたちが、家庭以外の大人との関わりを持つ場、また親の意見交換や情報交流の場として、家庭でも学校でもない場所が重要視されていることがうかがえる。

以上が運営者の回答から浮かび上がってくるビジョン、求める「子どもの居場所像」といえる。

次にそのビジョンの特徴的な記述をリストアップした。

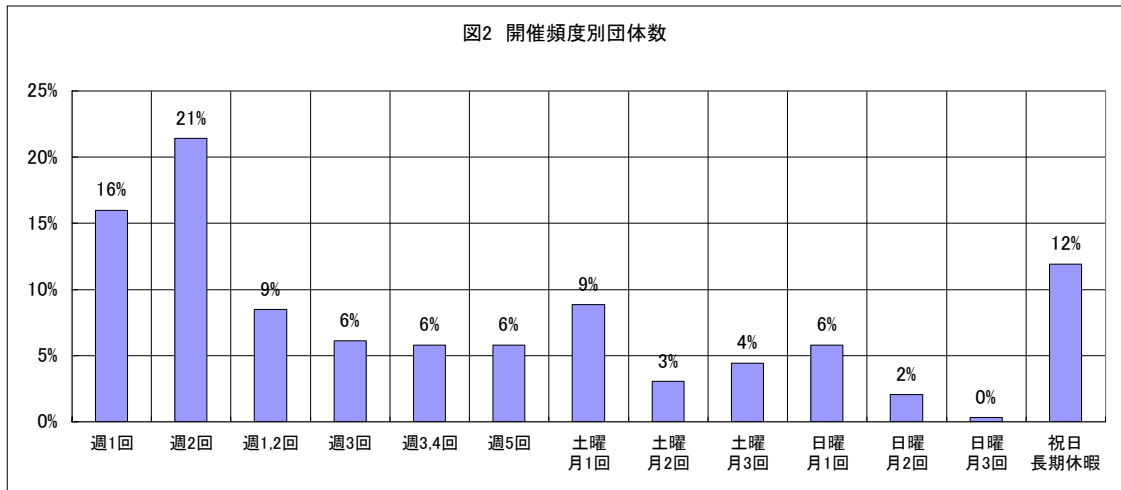
居場所のタイプ	運営者の回答による、居場所の「ビジョン」・「目的」
プログラム型 体験・遊び	感性豊かになること。子どもの主体性を育てること。
	いろいろなことを体験できる場の提供。枠にとらわれず、のびのび遊ぶ場の提供。地域の大人との関わりを深める場の提供。
	本物の素材「紙」「竹」「木」などを使ってもものづくりをする。手・耳・目・口を使い気配を感じ、五感に培われたものづくりを通じて学び自己表現をする。異年齢の人と関わりコミュニケーションをとる。
	いろんな人に出会うことにより人間形成が出来る。いろんなスポーツをし、体を動かす事により身体能力も高まる。英会話・手話なども身近にある事により、上達する事が出来る。
	安心して集える地域の場所。チャレンジできる場所。子ども自らが考え、発信できる場所。
	子どもたちが放課後自由に立ち寄れるところ。子どもたちを見守る大人、子どもたちの話を聞ける大人が必ずいるところ。子どもたちの生活圏にあり、地域の人にも認知され、協力、支援していただける場。
	地域社会で子どもたちが生き生き過ごせるようにする。地域の中に居場所をつくること。子どもたちが地域社会になじむこと。国籍を問わず子どもたち同士が仲良くできるようにすること。子どもたちにとって来やすく、しやすい居場所にする。
	場所としてのハードとしての子どもの居場所をつくるだけでなく、芸術文化を通じて表現することの楽しさや、仲間との共同作業により、心豊かな人間へとなること。
	遊びや踊りを通して表現することの楽しさを学ぶ。たくさんの友達と関わることで子どもたちのコミュニケーション能力を向上させる。そして最も重要なのは、子どもたちが自分の心を開放できるような心の居場所をつくること。
プログラム型 アート	子どもが楽しい時間を過ごすこと。自分を表現し、他の人とコミュニケーションすること。自分も他の人も大切な存在であるということに気付くこと。
	想像力・表現力をつける。仲間とのコミュニケーション
	様々なプログラムを体験することで、自分を表現することの楽しさ、コミュニケーションをすることの楽しさを体験して欲しい。

	とにかく楽しいこと
	子どもたちのコミュニケーション能力を高める。地域と劇団関係づくりを行い、認知度を高める。
	学校や家庭で味わえない子どもたち(参加者)にとって楽しい場所。
	考えることのできる子どもを育てたい。コミュニケーション能力を持った子どもを育てたい。子ども同士で年齢の縦横を越えた関係を作らせたい。大人と子どものコミュニケーションが成立するようにしたい。コミュニティと子どもの関係を成立させたい。
	ハードとしての子どもの居場所をつくるだけでなく、芸術文化を通じて表現することの楽しさや、仲間との共同作業により、心豊かな人間へとなること。
	遊びや踊りを通して表現することの楽しさを学ぶ。たくさんの友達と関わることで子どもたちのコミュニケーション能力を向上させる。そして最も重要なのは、子どもたちが自分の心を開放できるような心の居場所をつくること。
	子どもに限らず運営者や講師も楽しむ、成長する。学校ではできないレベルで、一人ひとりを見る。。地域、家庭、学校のリンクをもっと強くする。地域を巻き込んで事業を運営していく。
	大人と子ども、地域の人々の間に交流を生み出す。音楽や舞台芸術の専門家と接することを通じ、楽しさ、喜び、礼儀、思いやりなどいろいろなことを感じて欲しい。
	一人ひとりの子どもたちの成長、自立。安心して、挑戦できる場所。
	表現することが楽しくなる。自分や他者を好きになる。他者と上手にコミュニケーションがとれる。
	楽しめる場所であること。人と人とのつながり、仲間作り。子どもがいろいろなことに興味を持ち取り組んでいくこと。
	日常のストレスから解放され、ほっとできる居場所の提供。地域ぐるみで子どもの成長を見守るあたたかい街づくり。
ノンプログラム型 体験・遊び	自然の中で危険を身近に感じ、体験することで本当の危険を気付いたり、回避する力をつける。関わる人たちと深い信頼関係を紡ぐ。
	参加する子どもが自ら参加したいと思える場。心がホッとできる場。教室での人との関わり、交流が楽しいと思える場。
	子どもが自立した考えを持ち、まわりの人とコミュニケーションのできる人間に育ってほしい。そのためには、学校や家庭での人間関係だけでなく、地域子ども教室や自然の中での遊びが必要。
	子どもたちが年齢や学校を超えて交流する。指導されたり学習する場所ではない。センスオブワンダー、自然を心と身体で感じる。
	子どもの自己肯定感を育てる。子どものありのままを認める子ども観を地域に示していく。子どもの主体的な関わりを大切にする。遊びの中から学ぶことを大切にする。
	子どもが「自由にのびのびとやりたいことをやる」時間と場所の保証。「自分のやりたいこと」を実現するために、自ら考え行動できる。相手にも「自分のやりたいことがある」と、互いに認められる人間関係づくり。大人のスタッフがいて、保護者、子どもともに安心して集える場。子どもが安心して育つ地域づくり。
	放課後、子どもたちが、プログラムなしでもちょっと寄ってみたいと思うような場所。親以外に心を寄せられる大人や遊べるいろんな人たちが居る場所。安心、安全な場所。
	子どもにとって、安心して自分らしくふるまえて、自由に遊べる場所を提供できる。異年齢の交流の中で、他者への思いやりや気遣いをお互いのできるようになれたり、大人がほめたり、しかったりしながらちゃんと見守ってくれているという安心感を感じて欲しい。
	一人ひとりにとってよりどころになれるようにする。子どもたちがいろいろな人間関係を体験する。子どもたちが学校だけでは経験できないような生活、文化、自然を体験する。
	遊びを通して、異年齢の友達や地域の人たちとのふれあいの場をつくる。子ども自身の充足感、達成感を大切にする。子どもの育ちあいをサポートする。
子ども主体	学校の友だち、先生以外の人間関係を広げていく。色々な人との出会いとかかわりの場。ホッとくつろげる場所・遊びを通していろいろな事を学べる場所。
	子どもの自己肯定感を育てる。子どものありのままを認める子ども観を地域に示していく。子どもの主体的な関わりを大切にする。遊びの中から学ぶことを大切にする。
	子どもが主体的に考える事で企画力、運営力をつける。異年齢による作業を通じて互いに学び合う。日常では出来ない経験を通して様々な事への好奇心を育てる。子どもひとりひとりが大切にされる場。

	<p>子どもが安心してゆったりした気持ちでいられる居場所。子どもが安心して自信を持って自分を表現できる居場所になるよう、大人と子ども、子どもと子ども、大人と大人の関係をよりよいものにしていく。子どもが安心して暮らせる緩やかな地域社会の構築を目指している。</p>
	<p>ありのままの自分でいられる場所・やりたいことを実現できる場所。</p>
	<p>いろんな子ども、いろんな大人の中で、ハッとする発見や、ホッとできるやすらぎがある、おもしろくて居心地のいい、放課後の居場所。</p>
	<p>子どもが集う事で仲間作りを図る。子どもたちがいつでも集える仲間、時間、空間がある場所にしたい。自分の思いを出し、また友だちの思いを知る中で人との関わりを学ぶ場でありたい。いろんな年代の人と触れ合う事で人の生き方のモデルをみる場。</p>
	<p>子どもがほっとできる場。子どもひとりひとりを大切にできる場所。</p>
	<p>安心して好きなことに夢中になれる場所と仲間をつくること。</p>
子どもと協働	<p>子どもたちが放課後自由に立ち寄れるところ。子どもたちを見守る大人、子どもたちの話を聞ける大人が必ずいるところ。子どもたちの生活圏にあること。地域の人にも認知され、協力、支援していただけるところ。</p>
	<p>子どもの集団作り。子どもの主体性が身につく。技を見つけて自信が持てる。</p>
	<p>学校の外の社会に興味を持つこと。社会との関係作りに興味を持つこと。社会で活躍している専門家に接することで学校での授業がどのように実社会で生かされているかを知ること。</p>
	<p>自ら考え、実行する力を養う。思いっきり身体を動かす楽しさを感じ、自己表現できる人材を育てる。</p>
	<p>地域の子どもたちが気軽に集える場所。地域の子どもたち、一人一人が大切にされる場所。子どもが指導員に自分の気持ちを話せるようになること。</p>
	<p>子ども同士の交流。親の意見交換や情報の場。子どもにとって家族以外の大人との関わりを持つ場。</p>
	<p>子どもがのびやかに自分らしくいられる場所。ここで遊んだり、体験したりすることを通して、自分や他者の能力を認め、違いを認めあい、自分に対しては自信を、他者に対しては尊敬の念を形成していく。また新たな能力を獲得していくこと</p>
	<p>地域とのつながりが深まっていく。地域のことが好きになっていく。地域の文化や歴史を大切にしようとする心が生まれる。学校での勉強が社会での活動と具体的につながっている実感がわく。これらのことが遊びの中から楽しく身についていく。</p>
	<p>楽しめる場所であること。人と人とのつながり、仲間作り。</p>
	<p>音楽や楽器にふれることでの文化活動。子どもの感性の幅を広げる。</p>
	<p>家庭でも学校でもない場所で安心して本音を出せる場。子どもの成長を見守り、手助けできる大人たちがいることを教える場。</p>
	<p>子ども一人一人がオリジナリティを発揮するために、自分のことは自分で決め、選択し、行動する体験を積む。本物に触れる。仲間とともに作り上げる喜びを知る。自分の行動が、自分自身や世の中の役に立つことを知る。</p>
	<p>子どもたちにとってフリースペースであること・継続的で積み重ねていくいろんな遊びに参加し、体験、創造することを通してより自分らしく自分を表現する場づくり・五感を使って遊びながら学べる創造的空間づくり。</p>
遊び	<p>子どもたちにとってフリースペースであること・継続的で積み重ねていくいろんな遊びに参加し、体験、創造することを通してより自分らしく自分を表現する場づくり・五感を使って遊びながら学べる創造的空間づくり。</p>

Ⅲ. 開催回数は週2回程度

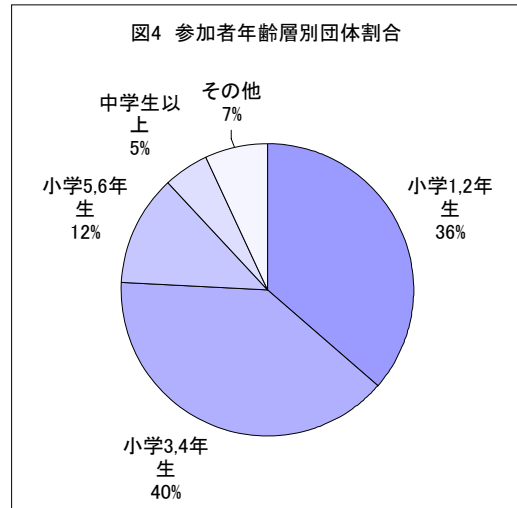
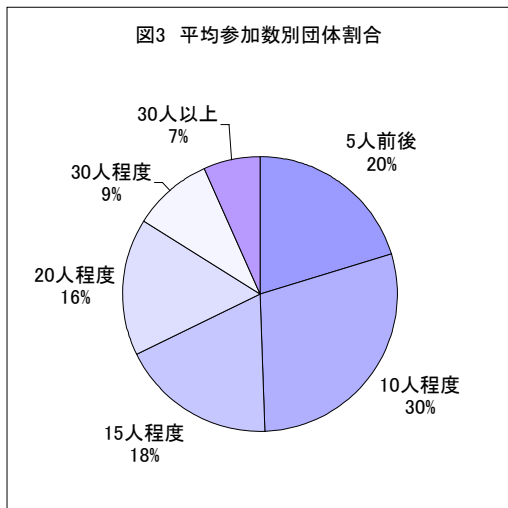
開催頻度は週2回が21%と一番多く、週1回の16%、週1～2回の9%と合わせると半数近くを占め、週3～5回開催(52事業)、他は土・日・祝日・長期休暇開催となっている。したがって地域子ども教室の半数が、週1～2回開催していると言える。子どもにとっては何時でも行けることが望ましいが、現在の運営体制ではこれが精一杯の状況でもあると言えるのかもしれない。【図2】



IV. 子どもは小学校中学年以下が中心で10人程度

平均参加数は、10人程度が30%と一番多く、それに続く5人前後20%、15人程度18%、20人程度16%となっている。【図3】

参加者の年齢層は小学3、4年生が40%、1、2年生が36%、5、6年生が12%、中学生以上の参加は5%にとどまっている。現状では、小学校中・低学年主体の居場所となっていることがうかがえる。【図4】



こうした傾向に、芸術文化活動をしているところからは、「低学年が多いためプログラムを変更した」「年齢差、成長の度合いが違って指導に難しいケースがある」。また、スポーツ系の活動をしているところからは、「1年生～6年生までいると理解度、体力に差があり、一度に指導することが難しく苦慮している」「1～2年生の割合が多いと、中、高学年の子どもの力が十分に発揮できないように思う」といった声もあがっている。

しかし、多くの運営者は「幼児から高学年、中学生まで幅広く対応する」と答えており、幅広い異年齢集団が生まれることを期待していることがうかがえる。「子どもの集団では、一つ『ケンカ』があっても高学年や中学生が入っていると、子ども同士の中で上手く解決されていくが、低学年同士ではどうしても指導員の仲裁が必要になっている」という記述があり、高学年も入った異年齢集団をどうつくるかが、これからの課題として見えてくる。

また、低学年が多いことは当初から予測できたことで、この事業を継続することで低学年の子どもたちが高学年になっても継続して参加することを期待している。そのためには、参加したくなる人間関係づくりが必要であり、指導員として青年層の関わりが大きいことも上げられている。

V. 会場は公民館を中心にさまざまに工夫

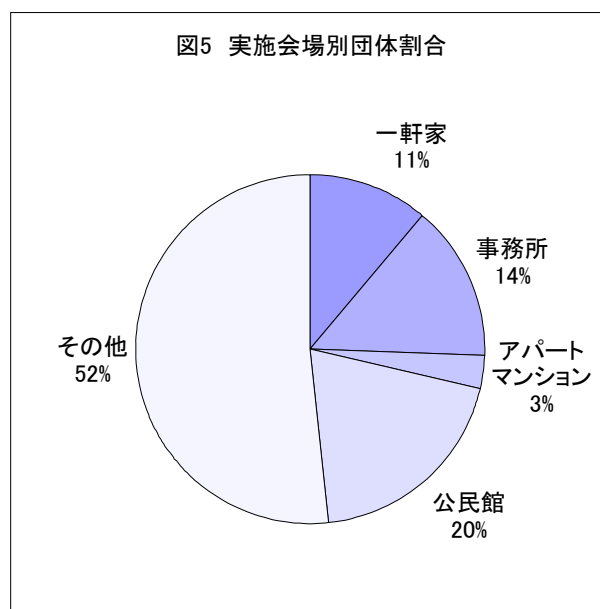
活動に使われる会場は、公民館20%、団体事務所14%、一軒家11%、アパート・マンション3%、その他52%となっている。【図5】

実施会場のうち2割が公民館で開催されている。その他が約半数を占めているが、小学校、団地の集会所、公的、民間の集会場や、時には屋外などがあげられている。

会場が確保されているところでは、「学校や公民館との良い関係が出来て使いやすい」

「ゆったりくつろげる空間もありとても良い」「必要な設備が整っている」「交通の便も環境もよく、分かりやすく参加しやすい」という声があがっている。一方で、「少し狭い」「子どもの使用を嫌がられる」という声もある。

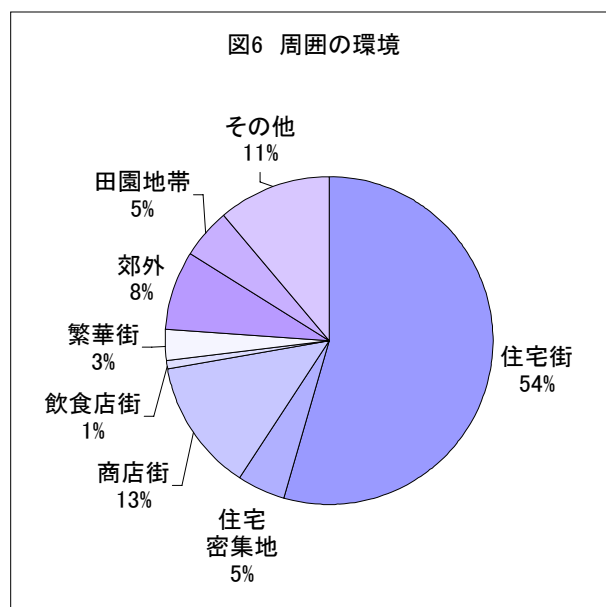
団体の事務所以外の会場は、いずれも開催日だけの借用で、そのたびに活動道具一式を持って移動、準備をする大変さが出されている。地域で子どもたちが日常的に出入りし、何時でも子ども



もが集まれる拠点となる、常設で専用会場の確保が望まれている。理想的な会場については「学校の近くの児童館的なもの」「交通の便が良く、子どもが一人で通えるところ」といった声が出されている。

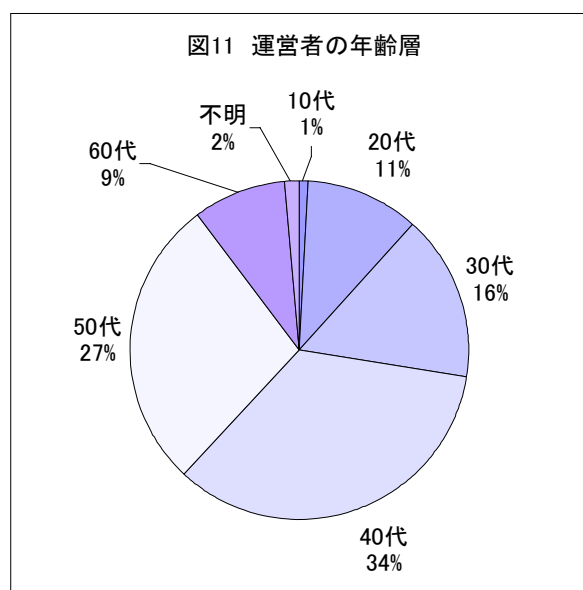
VI. 安全に配慮した環境で

実施会場の周囲の環境は、その半数以上が住宅街にあり、子どもが集まる場所として環境と安全性が重視されていることがうかがえる。心配な点としては、①最近不審者が出た。②時間や曜日によって人通りが少ない。③交通の便が悪く、保護者の負担がある。④交通量が多い上に歩道が整備されていない。などが上げられている。【図6】



VII. 運営者は40代、50代の女性が中心

運営者の年齢は、10代～60代までが幅広く関わっていることがわかる。その中心は40代が35%、50代が28%と40～50代が6割以上を占める。性別では女性72%、男性28%と40～50代の女性たちが主体となっている。その主な職業は、NPO職員が94事業、主婦・主夫が49事業、団体職員、学生、会社員と多岐に渡っている。運営者の活動経験は、3年以上が66%で、これまで既に色々な場で活動している人たちが、子どもを中心にした地域コミュニティの再生に努力している姿がうかがえる。【図11】

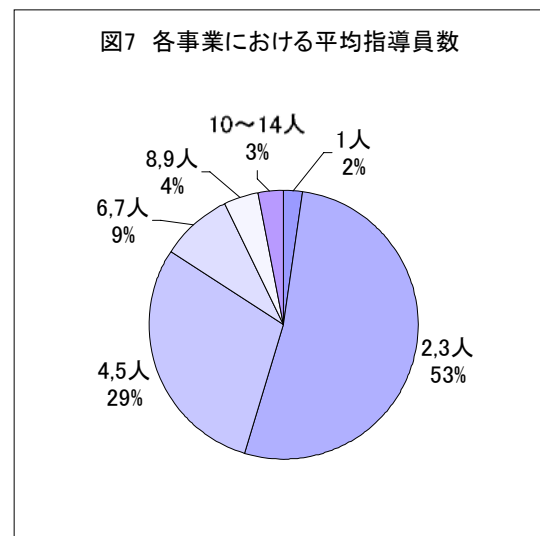


Ⅷ. 指導員は2～3人

地域子ども教室での1回あたりの指導員数は、2～3人というところが140事業と過半数を占め、4～5人というところが80事業となっている。そして指導員は80%以上が運営団体関係者となっている。それには運営団体に所属する青年層の参加もあり、子どもとの関係において歓迎されている。2～3人、8～9人の指導員のいるところでは地域の人が入って地域との連携が始まったところもある。しかし、まだまだ少数である。【図7】

指導員の母体となっている団体は子ども劇場、フリースクール、行政関係機関、劇団などとなっている。

団体等の活動と地域子ども教室との関係では、この事業のために会を発足させた団体もあるが、多くが団体の特性を生かし、その一環として地域子ども教室を運営していることがわかった。このことが、団体にとっては、より子どもの生活に密着した日常的な活動へと広がり、地域との密着度を高めることに繋がっている。スポーツや芸術文化団体は、「自分たちの持っている技術や手法が子どもを通して地域に広がっているを感じている」「伝統芸能の伝承と普及が可能になった」といった声もあがっている。また、スポーツや芸術文化活動のプロの指導者が子どもに関わることで、「地域興しとして歓迎されている」という声もある。



Ⅸ. 安全対策には力を入れる

地域子ども教室の活動中に「ひやり」「はっと」したことがあると答えた運営者は3割以上にのぼる。内容は「やけど」「刃物で切った」「途中でいなくなった」「一人で帰ってしまった」「道路に飛び出した」「ぶつかって怪我をした」「けんかをして怪我をした」「転倒」「階段から落ちた」「3階の窓から身を乗り出していた」等々、たくさんの例があげられている。

子どもの活動中には思わぬ事故はあると考えておく必要がある。対応としては、教室が始まる前にスタッフで会場の点検、救急箱の置き場所の確認などがあげられている。また、危機管理マニュアルを作成し、それを基に研修会を開催するなど対応している様子が見えてくる。

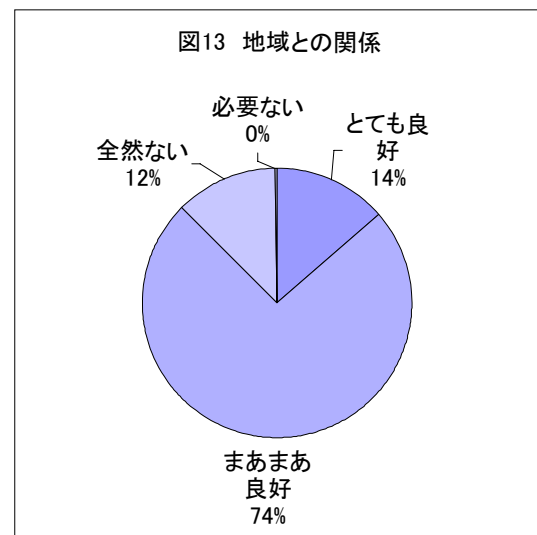
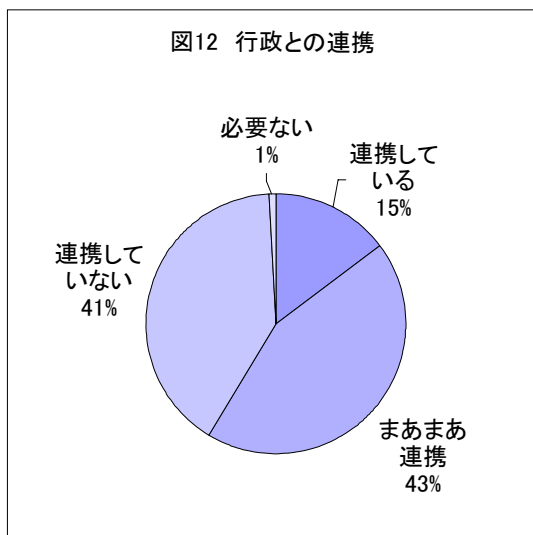
子どもたちが家庭や学校、塾などでは体験できない、管理されない自由で楽しい時間と空間を保障したいと考える一方で、通学途中の子どもの事件があいつぐ中、安心できる場を確保し、その場の安全管理を強める動きが出ている。それが子どもの自主性や創造性を妨げることになるのではないかと矛盾を抱え苦しんでいる声もあがっている。

X. 地域や行政との連携は良好に

「行政と連携している」が15%、「まあまあ連携」が43%、「連携していない」が41%であった。運営者も行政との連携の必要性を思いつつも現状は積極的な協力関係が生まれていない。それは目の前の運営に追われて時間的余裕が無いこともあるが、何を協力連携していくのか具体的に見えないままに進んでいる点もあると答えている。

地域との連携は良好14%、まあまあ良好74%と合わせると、90%近くが地域との連携が上手くいっていると感じている。【図12】【図13】

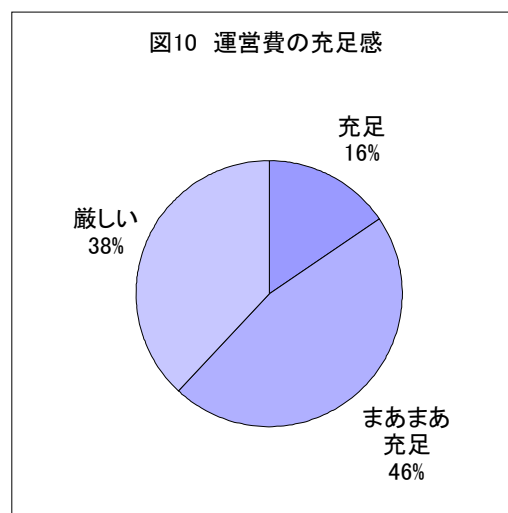
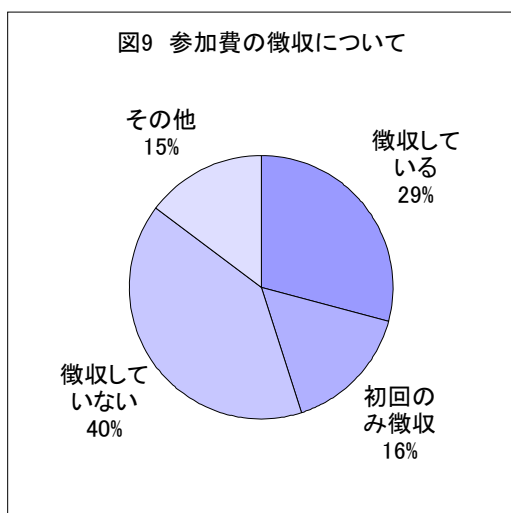
その内容は、情報交換の機会をつくる、スタッフの支援を地域の人に依頼、地域のイベントへの参加、自治体広報誌に掲載してもらって地域への周知を図る、学校開放委員会のメンバーになり他の地域団体との情報交換の機会を作っているなど。多くの運営者が地域の人たちと一緒に子どもたちを育てようという姿勢で関係づくりをしていることがうかがえる。中には他団体主催の地域子ども教室の子どもたちとの交流など良い関係をつくっているところもあった。また、自治体(教育委員会)主催の地域子ども教室の実行委員会のメンバーとなって、連携を図っていると答えた運営者もあった。



XI. ぜひ事業を継続したい

今後の事業継続の意思は「ぜひ継続したい」が54%、「継続したい」が35%と、90%近くの運営者が答えている。その理由として、「子どものよりどころになっている」「子どもに必要な体験の場になっている」「子どもの期待が大きくなってきた」「地域の中に安心して行ける場所が必要」と、集団の中で子どもたちの成長する姿を見ることができ、それが関わる大人たちの力になっていることがうかがえる。

この事業を継続展開・充実させていくために必要なことは、「財政基盤の整備・強化」がトップに挙げられている。地域子ども教室へ参加するに当たっての「参加費」を徴収しているところは75事業(29%)で、徴収していない105事業(41%)、初回のみ徴収40事業(15%)、その他39事業(15%)となっている。今年度は委託料があったため、70%近くの団体が「充足している」「まあまあ充足している」と答えているが、継続運営には財政基盤の確立が欠かせないと考えていることがうかがえる。【図9】【図10】



続いて、「指導員の体制の充実と育成・スキルアップ」があげられ、指導員として必要なことは「子どもとあそぶ技能のスキルアップ」「子どものファシリテーターとしての子どもへのかかわり」「コミュニケーションスキル」「リスクマネジメント」そして何よりも「人間性と優しさ」が求められている。

また、運営者に必要なこととして、「地域や他団体とのネットワークづくり」「子どもの状況を把握し、子どもに対する接し方を身につけること」などが挙げられている。さらに「運営者としてマネジメント力をつけたい、研修を」という積極的な声もあがっている。

今年度から「地域子ども教室」へのNPOの参加によって、地域に子どもの集まる拠点が大きく広がり、これまでに出会わなかった人々との新しい出会いの場となっている。

そこで、子どもとプロのアーティストを始め、各分野の専門家やその道の達人たちと出会いの機会を設けることにより、これまでの「学校」や「家族」中心の子どもの人間関係の幅を広げ、プログラムを通して人間への信頼感を育てることを運営者は心がけていることがわかった。伝統芸能や伝

統文化継承の機会となっていることも、子どもたちが日々暮らしている地域を見直していくチャンスになることが期待される。

また、地域のおとなの協力を求め、子どもたちを「地域の子ども」として見守り育てていく地域コミュニティの再生に努力している運営者の姿が見える。

こうした新しい子どもの居場所は継続してこそ、その役割が果たされていくのだが、継続のためにはいくつかの課題がある。

集まりやすくしかも安心して集まれる場所の確保、財政基盤の強化、子どもに直接関わる指導員の人としての完成度や体制の充実が求められている。

【まとめ担当 三好 美喜子】

調査を終えて

この調査研究の主題である「子どもにとっての居場所とは、何か？」という、漠とした問いの答えを得るには、まず、子どもたちの生活現状を捉えなくてはならない。「地域コミュニティの崩壊が叫ばれて久しく、少子高齢化が重大な課題となっているわが国」という常套句は、この北海道から沖縄 322 箇所配布した「子ども」「指導員」「運営者」「保護者」各 1 セットの調査票が、分厚い電話帳のようになって次々と返送された延べ 4220 人の回答から、子どもたち自身では解決の出来ない時間・空間・仲間という“三間”の欠落が、リアルに現れた。

特に昨年、子どもたちが被・加害者になるという、数々の痛ましい事件によって、親の不安は猶予のないものとなり、地域社会の子どもへの安全管理は、日本中で寒々とした緊張状態をつくりだしている。地域によっては、学校の放課後は“みだりに外出をしないように”という通達が、安全を確保するための「戒厳令」として発令され、結果、子どもたちの日常的な成育過程で体験し、体得すべき遊びや仲間づくり、目標にチャレンジしていく多様な「子どもの文化」は、危機的、壊滅的な状態へと歩む日本社会の姿として見えてくる。

こうした状況下で改めて「子どもにとっての居場所とは、何か？」という問いを発するならば、既存の「居場所論」はすでに通用せず、「現在の」という言葉をシッカリと添える必要を感じる。子どもの一つの「居場所」としての学校も、子どもたちの評価によれば「勉強」を第一義とする「場」が、子どもたちの関係性を育む「居場所」として、すでに万能ではないことが垣間見えてくる。一方、民間の「居場所づくり」といった、ささやかな仕掛けもまた、万能ではない。しかしその上でなお、この居場所づくりに参加した多くの子どもたちが、子どもたちの求める居場所を地域に創ろうとした多くの関係者の思いの中で、見事にこれらの居場所を求めている姿があらわれた。一事業あたり百数十万の予算と、準備もそこそこの第一年度目の 300 を超える異なる活動拠点に対する調査で、子どもたちとその保護者たちから、これほどの評価が得られることをどれだけの関係者が予想したのだろうか。

このことを大きく捉えれば、一つには、子どもたちのおかれている状況が、まったくもって「寒い」状況の裏返しとして見えてくる。また一方で、こうした子どもと地域に対する的確な状況認識と、この居場所づくりに対する関係者の多大な努力、そしてあるべき「子ども観」が発揮されたと見てよいだろう。そして、調査研究から明らかになるこの二つの方向性に、まず読み取るべきことは、子どもたちは、子ども時代を通じた 18 年間の体験と学びを経て、社会の一員へと「子ども時代」を巣立っていくという自明の事実から、子どもたちの成育体験の大半を占める「家庭」「学校」「地域社会」は、それぞれの役割と連携において十全に機能しているのかを改めて点検しなくてはならない、という警鐘であろう。この事実に対する深い考察と十分な対応を多くの人々に求めたいと思うのは、この居場所づくりにかかわった直接関係者たちだけではないはずである。

「居場所づくり」を進行している最中に、またこうして結果をまとめている最中に、子どもたちのあつてはならない事件が次々に報道される。そのたびに「家庭」「学校」「地域社会」が、未だにかつ

での役割において、暗黙の責任を問うている気がする。しかし、その存立基盤としての価値基準も経済原理も大きく様変わりし、そこから生み出される人間関係そのものが変質していることを私たちおとな世代は、ノスタルジーを捨て、素直に認識しなくてはならないのではないか。かつての私たちが育ったあらゆる環境は激変している。こうした状況下で、かつての「家庭」「学校」「地域社会」の役割分担やテリトリーに固執した責任の取り方を求めることが、今を生きる“子どもたちの関係性”を危機的な状況に追いやっていることに、もうそろそろ気づくべきである。

『家庭』『学校』『地域社会』という三つのステージは、それぞれ子どもにとって欠かせない『居場所』であり、『子どもが大人になる』ということは、一人の人間が、社会を信頼に足る居場所とし、世界を居場所としていくためのプロセスである」、という定義を認めるなら、この調査結果から言えることは、「地域社会」という居場所には、現代の「家庭」「学校」ではまかなうことのできない、多様な世代、価値観、文化が子どもたちの手の届くところに準備されるべきであり、子どもたち自身と、そして他者との葛藤や対立を含んだ関係性が、肯定的な体験として得られる環境が準備されるべきだと考えられる。そして、この民間団体による322の居場所づくり全体が、その巧拙も含めて、我々おとなが「何を」「どのように」すればいいのかを具体的に答えている。

「居場所づくり」が取り組んだ課題は、第一に、子どもたちが多様な人間と自然に関わることのできるソフトの質とあり方。第二に、子どもたちが主体性を発揮できるような、おとなの関係性も含む「居場所」の環境づくり。第三は、子どもと「居場所」を包み込む地域社会への、発信のあり方、という三つのコミュニティ開発のベクトルがあることが、調査結果からわかった。

「子どもの居場所」は、決して地域社会そのものではない。しかし、ここまでの前提をふまえると、「居場所づくり」が求めた地域との接点のあり方に、重大な鍵が浮かび上がる。少なからぬ運営者がビジョンに挙げているのは、地域の人々と子どもたち、それぞれの主体を損なわない関係づくりであり、このように準備された、ソフトと人間との出会いをパッケージした「居場所」によって、コミュニケーション力や人間関係調整力や感動といった「文化」と「力」を子どもたちが体得することであり、さらにその先には、子どもたち自身が社会との関係性を調整し、自らの居場所を自らが形成していくことが着地点として想起できる。子どもたちの内在する力を育み、一方で子どもたちが社会に対するチャレンジ、営みを許容できる社会環境づくりの二つを地域の人々は切実に求め、この「居場所づくり」は、この課題に対するささやかでも、稀有な“かけはし”創りに成功している。

それぞれの居場所づくりのプログラムは一見多様である。しかしここに挙げた三つのベクトル＝評価軸と、エンドユーザーである子どもたちと保護者からの評価を重ね合わせれば、「現代の子どもたちの居場所とは何か?」という問いへの答えも、シンプルに浮かび上がる。

第一の「ソフト」については、参加した子どもたちの評価として、おもしろさ、ワクワクといった感動を含む体験の質と、他者とかかわりながら子ども自身が個として承認・尊重されることを挙げ、その成果として、居場所の体験による子どものコミュニケーション力など、ポジティブな成長と変化を多くの保護者が認めたことは、社会的な逸脱の原因に生育歴を含めるなら、決定的な可能性となる。

また第二の課題については、個々人を尊重し、人と人との関係を肯定し、かかわりあうことが喜びとなるような関係性である。そして第三の課題に対しては、かくありたいという「情熱」による、運営サイド、地域の人々のつながりそのものが、子どもたちにとって最大の「居場所」となっていくことがうかがえた。さらに子どもたちの閉じられていた心が開くときに生み出すパワー自体が魅力であり、その力が再び多様な人々を巻き込んでいくことを、指導員の多くの言葉が予感させている。

これらの成果要因は、こうした願いや思いの「メッセージ」を具体的に伝達可能にする知恵が、「遊び」や「芸術」「文化」、「スポーツ」といった、居場所でのソフトであり、コンテンツであり、それら人間の「文化」は、一部の専門家やディレタントの蘊蓄や批評をはるかに超えて、リアルな体験の真の力が発揮されたに違いない。さらに見落としがちな重要なポイントとして、居場所は「おとなと話することができる場」であり、子どもたちは“信頼できる異世代の存在”を歓迎している。多様な文化や芸や技は、そのコンテンツを伝える一人ひとりの個性や精神性や人間臭さによって、子どもたちは人間と関わることの豊かさと共に承認し、継承していくのではないか。現代社会にあって、おとなは子どもと関わることをあきらめなくてもよいことを子どもたちが教えてくれている。

この「居場所」の主体は子どもたちであるが、同時に子どもたちに「こうあってほしい」という思いを持つ人々は黒子ではなく、むしろ、子どもたちが求めるのは、仮面を脱いだ一人ひとりの人間とのかかわりであることを思い起こさせてくれた。だからこそ、子どもとかかわるおとなの質や、その居場所の必要要件も、今後の居場所づくりの中で、子どもと共に切磋琢磨されていくと考えられる。

子どもに媚びることなく、未来を創っていくパートナーとしての子どものおとなの関係のあり方を『子どもの居場所づくり』は常に提起していこう。なぜならば、現代の子どもたちにとっての「居場所」は、心身の安全と安心を確保されると同時に、さらに人間と触れ合う関係自体がワクワクするような魅力がなければ、多忙な子どもたちが「居場所」へと移動する必然は生じないだろうからだ。

最後に、理想だけではすまない葛藤や、数限りない現実的な課題を一つひとつ克服する創造的な営みによって、このような子どもたちの変化が生み出されていることを捉えておかななくてはならない。地域の居場所づくりをマネジメントした運営チーム、民間団体運営連絡協議会の300を超える事業へのサポート、そして様々な揺らぎを抱えた社会にあって、英断ともいえる文部科学省の居場所づくりへのチャレンジ、そして、子どもを真ん中に置いた市民・地域行政・企業との連携による地域コミュニティの再構築という、確かな成果の結実まで、居場所づくりの継続を期待したい。

様々なハードルは次々と現れるものであり、参加した一人ひとりの子どもたちの期待と、これから関わる可能性のある地域の人々の期待を、私たちがどのように結実させていくのか、あきらめない努力を続けていきたいと思わせる調査の結果であったこと。そして、求められるリソースの発信をさらに継続していくことが必要であることを調査研究員一同、強く感じていることを報告としたい。

2006年3月

調査研究責任者 稲垣秀一

(特定非営利活動法人 子どもNPO・子ども劇場全国センター)

平成 17 年度 文部科学省 地域子ども教室推進事業
地域の民間団体による
「子どもの居場所づくり」に関する調査研究 報告書

発行日 2006年3月31日
発行 地域子ども教室 全国民間団体運営連絡協議会
調査研究協力 中央大学研究開発機構
連絡先 〒106-0032 東京都港区六本木 4-7-14 みなとNPOハウス 3F
TEL 03-5785-1570 FAX 03-5785-1571